
第4章

アンケート調査による事業効果等の分析

第4章 アンケート調査による事業効果等の分析

4-1. 調査の概要

モデル事業においては、事業による取組の成果・効果を検証するため、全モデル校において、取組対象の児童生徒に対してモデル事業の取組前（以下「事前」という。）と取組後（以下「事後」という。）の計2回、全校・全学年共通のアンケート（以下「児童生徒アンケート」という。）を実施した。

また、モデル事業が特に「つながる」というテーマを掲げ、保護者を巻き込んだ取組を通じて子供の日常生活の基盤である家庭での食育の実践を重視している点を踏まえ、児童生徒への事後アンケート調査に併せ、保護者に対しても全校共通のアンケート（以下「保護者アンケート」という。）を実施した。

図表41 児童生徒アンケート及び保護者アンケートの概要

	児童生徒アンケート	保護者アンケート
調査対象	全モデル校の取組対象児童生徒 【事前調査】 6,713 人 【事後調査】 6,577 人	全モデル校の取組対象児童生徒の保護者 計 5,732 人
調査時期	【事前調査】 平成 29 年 6 月頃 【事後調査】 平成 30 年 1 月頃	(事後調査のみ) 平成 30 年 1 月頃
調査方法	調査様式(全モデル校共通)は文部科学省から各市町村教育委員会に送付、教育委員会から各モデル校に配布し、各モデル校で調査を実施。	
調査項目	<u>I 定性的計測効果</u> 1. 食に関する意識(各項目4段階評価) ①朝食摂取に関する意識 ②共食に関する意識 ③栄養バランスを考えた食事に対する意識 ④ゆっくりよく噛んで食べることにに対する意識 ⑤食事マナーに対する意識 ⑥伝統的な食文化や行事食に関する意識 ⑦食事の際の衛生的な行動に対する意識 <u>II 定量的計測効果</u> 2. 朝食を毎日食べているか 3. 朝食を家族と一緒に食べる頻度 4. 夕食を家族と一緒に食べる頻度 5. 栄養バランスを考えた食事をとっている頻度	1. 取組を通じた子供の食に関する意識の変化 (SQ1-1) 意識のうち高まりがみられた内容 (SQ1-2) 意識が高まらなかった理由(記述) 2. 取組を通じた子供の食習慣等の変化 (SQ2-1) 改善された食習慣の内容 (SQ2-2) 食習慣が改善されなかった理由(記述) 3. 食育に関する取組についての感想等(記述)
備考	・小1～高校生まで設問項目・設問内容は共通 ・モデル校によっては全校児童ではなく各学年で1クラスのみ調査を実施している場合がある	

4-2. 児童生徒アンケートの集計・分析

(1) 対象者の属性

- ❖ 本アンケートの調査対象者は全モデル校の全児童生徒であるが、一部のモデル校では全校児童ではなく各学年1クラスずつに調査を実施したため、アンケート回答者は事前調査では6,713人、事後調査では6,577人であった。

	全体	性別		学校種別		
		男子	女子	小学生	中学生	高校生
事前調査	6,713 (100.0%)	3,391 (50.5%)	3,193 (47.6%)	4,137 (61.6%)	812 (12.1%)	1,764 (26.3%)
事後調査	6,577 (100.0%)	3,333 (50.7%)	3,159 (48.0%)	4,050 (61.6%)	783 (11.9%)	1,739 (26.4%)

	小学校						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
事前調査	4,137 (100.0%)	647 (15.6%)	644 (15.6%)	727 (17.6%)	691 (16.7%)	704 (17.0%)	724 (17.5%)
事後調査	4,050 (100.0%)	645 (15.9%)	633 (15.6%)	708 (17.5%)	674 (16.6%)	675 (16.7%)	715 (17.7%)

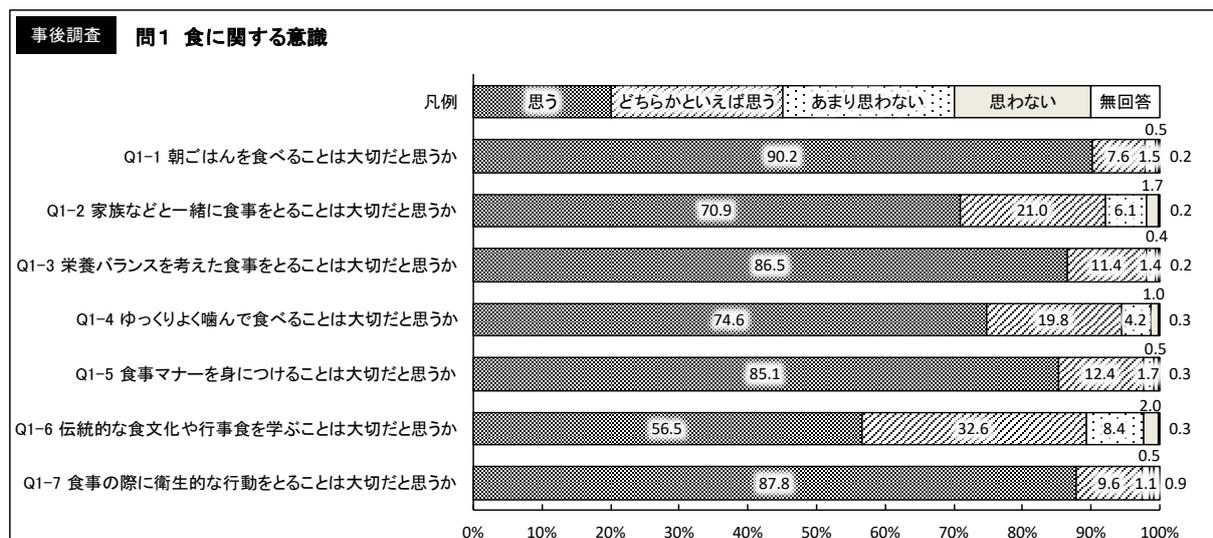
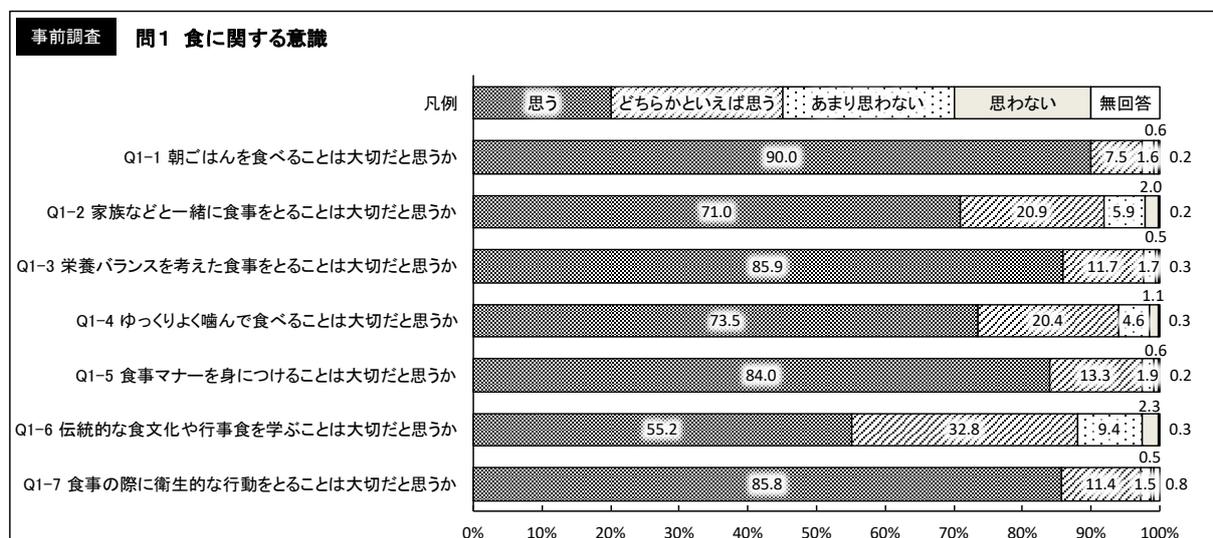
	中学校			高校				
	1年	2年	3年	1年	2年	3年		
事前調査	812 (100.0%)	251 (30.9%)	282 (34.7%)	279 (34.4%)	1,764 (100.0%)	651 (36.9%)	646 (36.6%)	467 (26.5%)
事後調査	783 (100.0%)	238 (30.4%)	274 (35.0%)	271 (34.6%)	1,739 (100.0%)	641 (36.9%)	641 (36.9%)	457 (26.3%)

※アンケートは無記名で実施されているため、児童生徒一人ひとりの事前調査の回答と事後調査の回答を対比することができない。このため、本調査研究では、モデル事業の取組を通じて一人ひとりの食に関する意識や食習慣が変化（改善）したかを把握したり、取組前後で食に関する意識が変わった子供と変わらなかった子供との間で食習慣の改善状況に違いがみられるかといった分析は行っていない。

(2) 食に関する意識

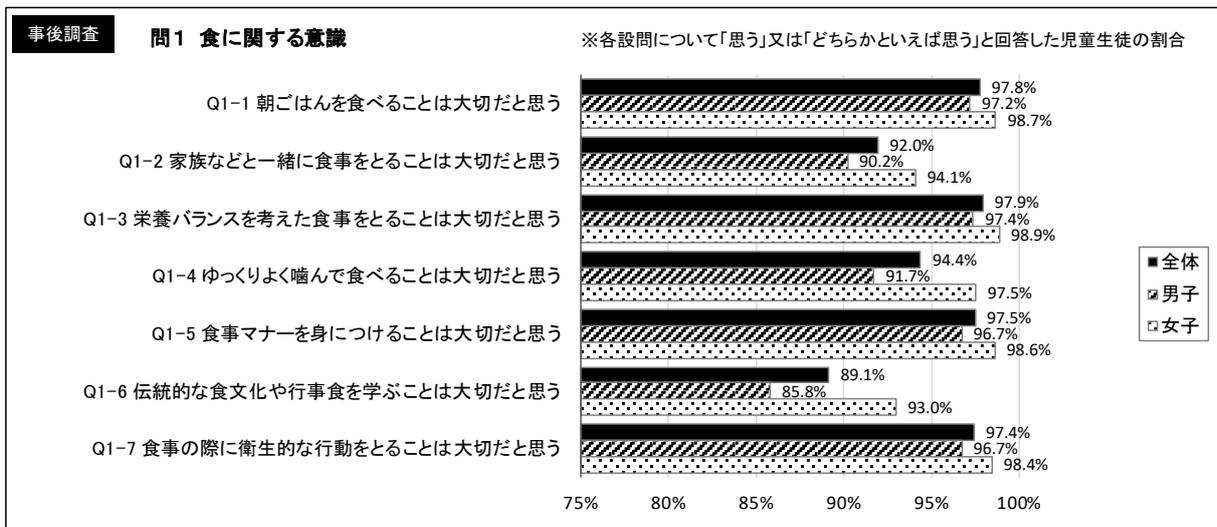
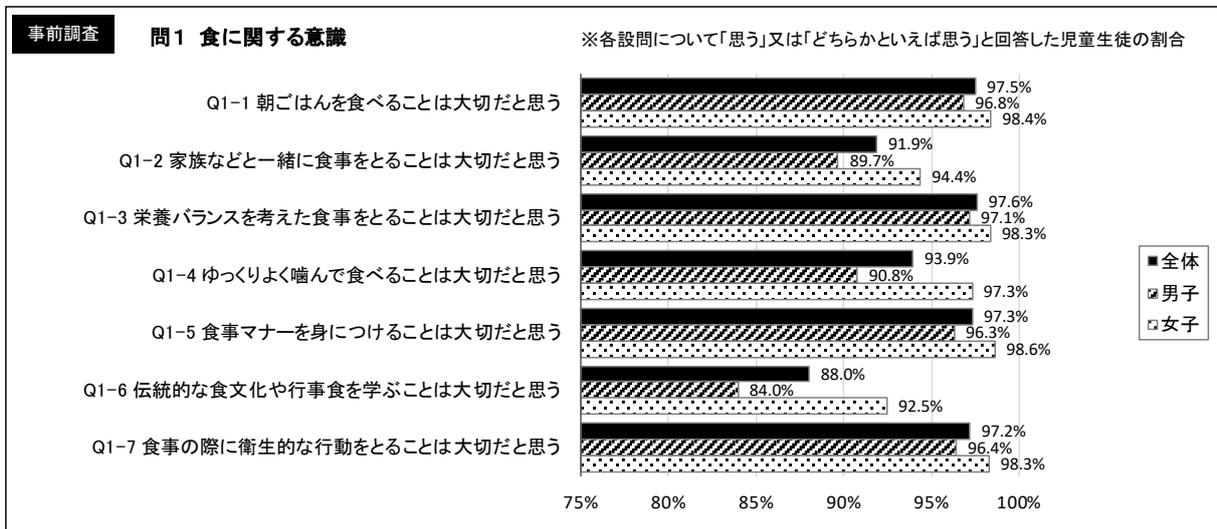
■全体

- ❖ 食に関する意識について7つの項目からみると、事前調査では「朝ごはんを食べること」については90.0%の児童生徒が「(大切だと)思う」としており、7項目中最も高い割合となった。これに次いで「栄養バランスを考えた食事をとること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」、「食事マナーを身につけること」について85%前後の児童生徒が「(大切だと)思う」としている。一方、「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」については、「(大切だと)思う」が55.2%と他の項目と比べて低く、「どちらかといえば(大切だと)思う」の割合が32.8%と高い。
- ❖ 事後調査についても事前調査と同様、「(大切だと)思う」の割合が最も高かったのは「朝ごはんを食べること」であり、90.2%と9割を超えている。次いで、「食事の際に衛生的な行動をとること」、「栄養バランスを考えた食事をとること」、「食事マナーを身につけること」が85%超となっている。



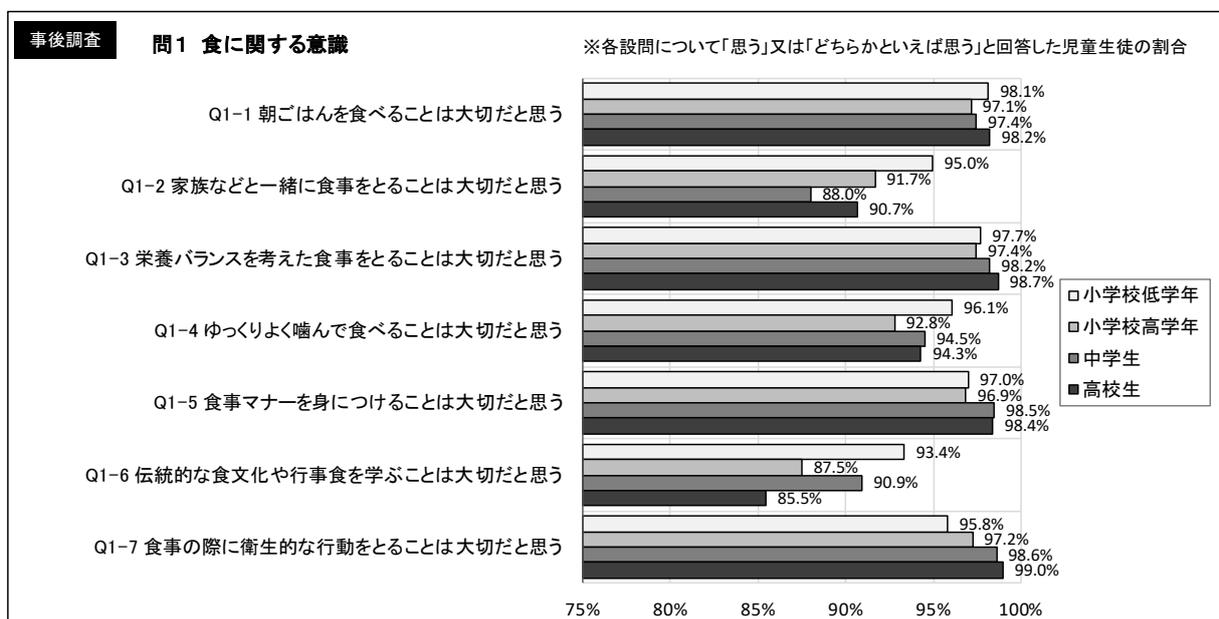
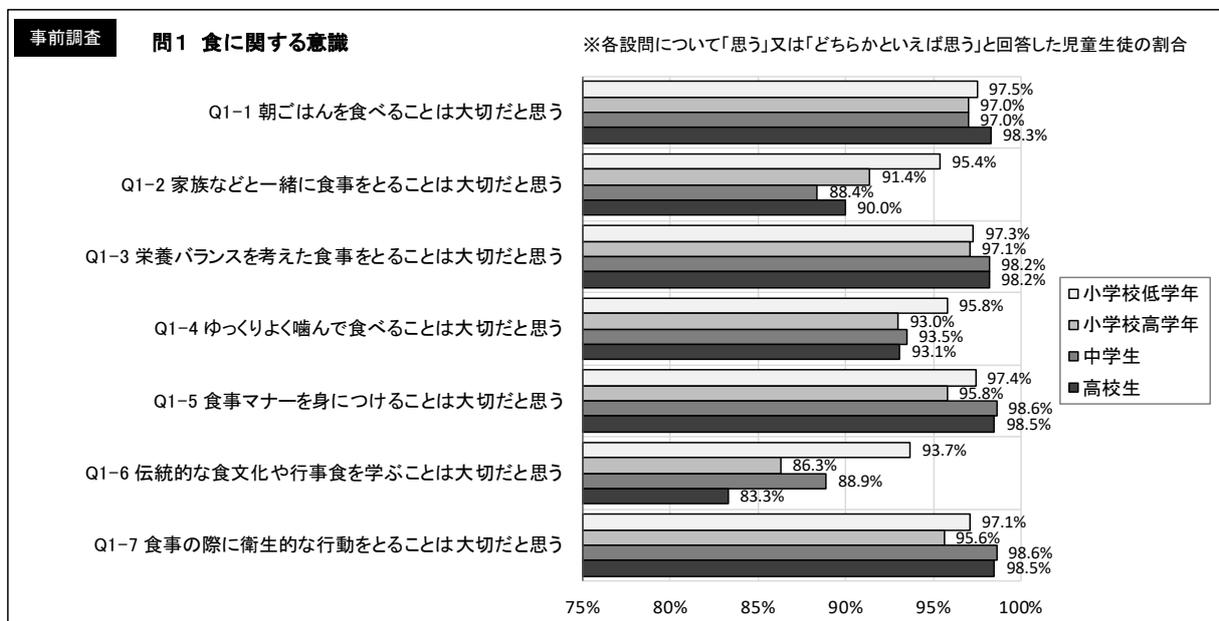
■性別

- ❖ 食に関する意識の高い児童生徒の割合、すなわち7項目それぞれについて「(大切だと)思う」及び「どちらかといえば(大切だと)思う」と回答した児童生徒の割合を性別で比較すると、事前調査ではいずれの項目も女子の方が男子よりも高くなっており、特に「朝ごはんを食べること」、「栄養バランスを考えた食事をとること」、「食事マナーを身につけること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」については女子の98%以上が大切だと思うとしている。これに対して男子では、「家族などと一緒に食事をとること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」に関して90%を下回っており、特に「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」については男女間の差が8.5ポイントと意識に大きな開きがみられる。
- ❖ 事後調査についても事前調査と同様の傾向がみられ、いずれの項目も女子の方が男子よりも「(大切だと)思う」及び「どちらかといえば(大切だと)思う」と回答した児童生徒の割合が高くなっている。



■学校種別

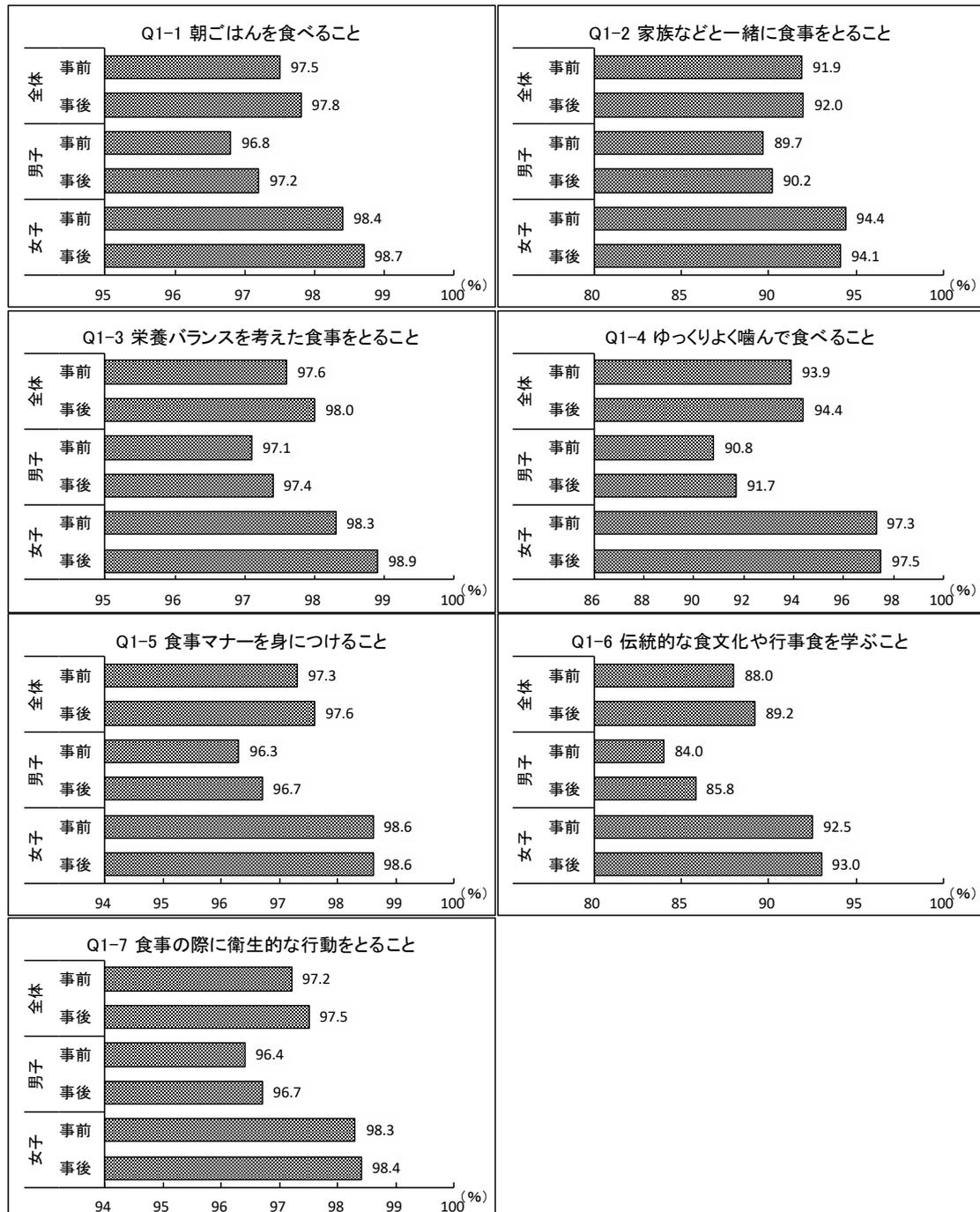
- ❖ 食に関する意識の高い児童生徒の割合について、学校種別で比較すると、事前調査では「朝ごはんを食べること」及び「栄養バランスを考えた食事をとること」については大きな差は見られないが、「家族などと一緒に食事をとること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」については小学生と中学生、高校生で意識の違いがみられ、特に小学校低学年では95%を超えているのに対して、中学生や高校生は80~90%と、小学校低学年より5~10ポイント下回っている。
- ❖ これに対し、事後調査をみると、「朝ごはんを食べること」及び「栄養バランスを考えた食事をとること」については事前調査と同様に学校種間で大きな差はなく、97~98%と高い水準が維持されている。また、事前調査で学校種間での差が大きかった「家族などと一緒に食事をとること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」については事後調査でも同様の傾向がみられるが、その差はやや縮小している。



■事前調査と事後調査での食に関する意識の高さの変化

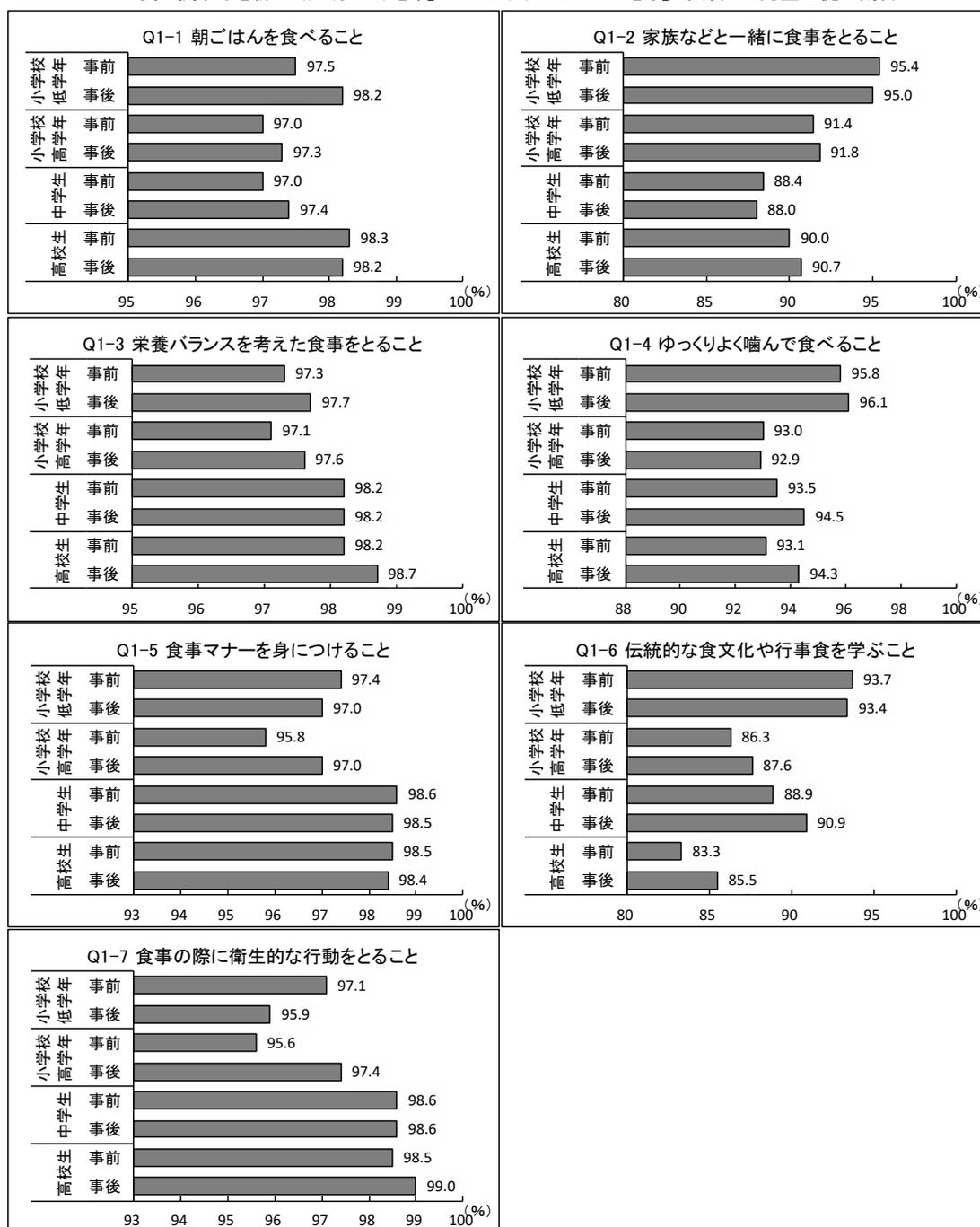
- ❖ 食に関する意識の各項目について「(大切だと)思う」及び「どちらかといえば(大切だと)思う」と回答した児童生徒の割合を事前調査と事後調査で比較すると、全体では7項目すべてで事前調査より事後調査の方が高い割合となり、食に関する意識が高まったことが示された。
- ❖ 性別で比較すると、意識の高い児童生徒の割合はいずれの項目でも男子の方が女子より低い、事前調査から事後調査にかけての割合の変化は女子より男子の方が大きくなっており、モデル事業の取組を通じて女子の食に関する意識は高い水準で維持され、女子より低かった男子の意識は高まったことが示された。

Q1-1～Q1-7 食に関する意識「(大切だと)思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した児童生徒の割合



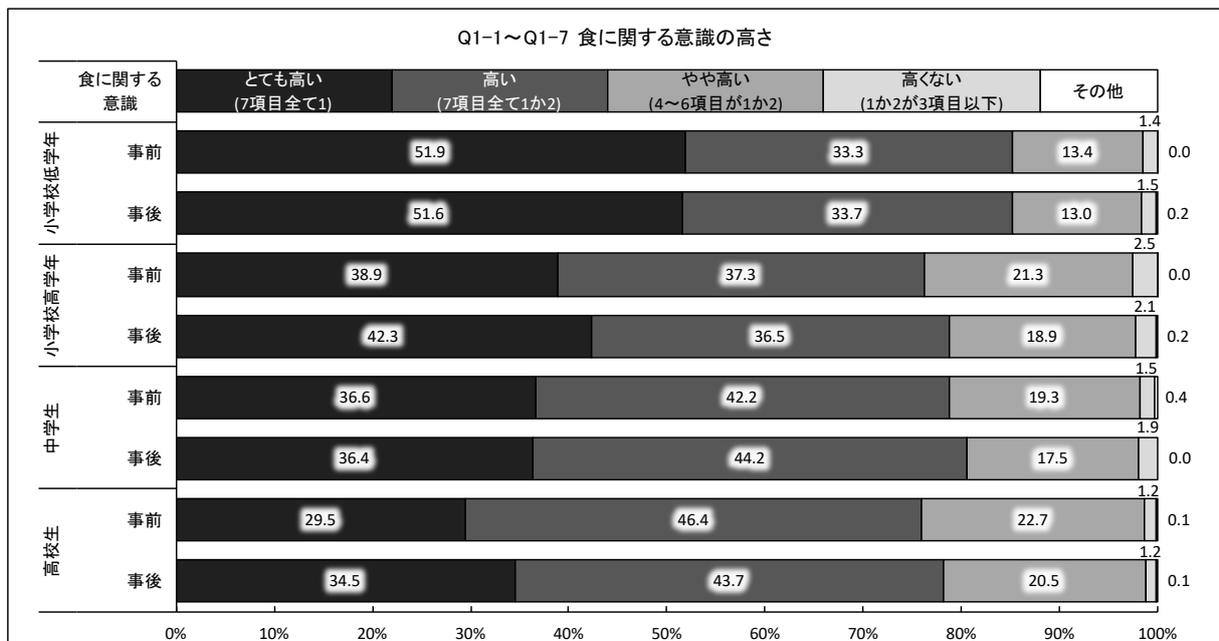
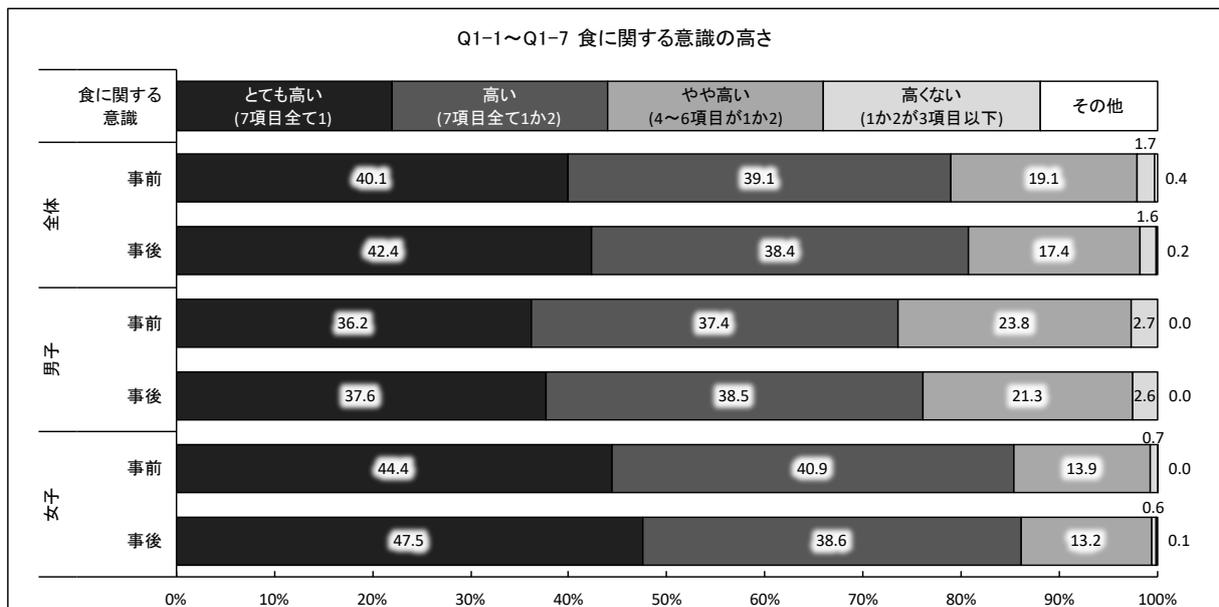
- ❖ 学校種別で比較すると、「朝ごはんを食べること」に対する意識が最も高まったのは小学校低学年で、事前・事後で0.6ポイント拡大している。
- ❖ 一方、「栄養バランスを考えた食事をとること」については高校生で最も意識の高まりがみられ、事後調査では98.7%と高い割合となっている。
- ❖ また「食事マナーを身につけること」や「食事の際に衛生的な行動をとること」については、小学校高学年で特に意識が高まったことがわかる。

Q1-1～Q1-7 食に関する意識「(大切だと)思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した児童生徒の割合



■食に関する意識が高い児童生徒の割合の変化

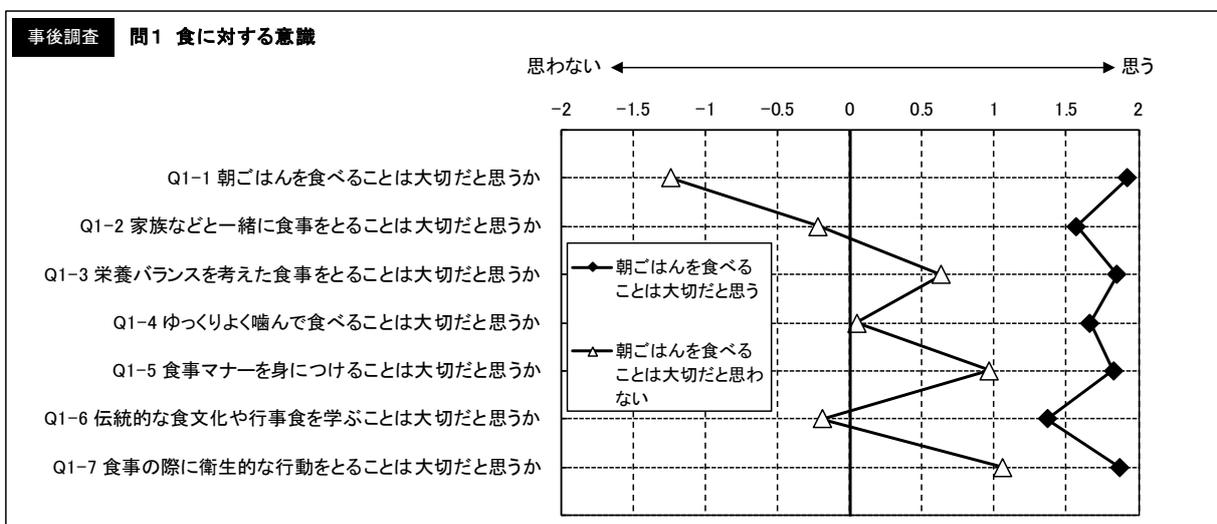
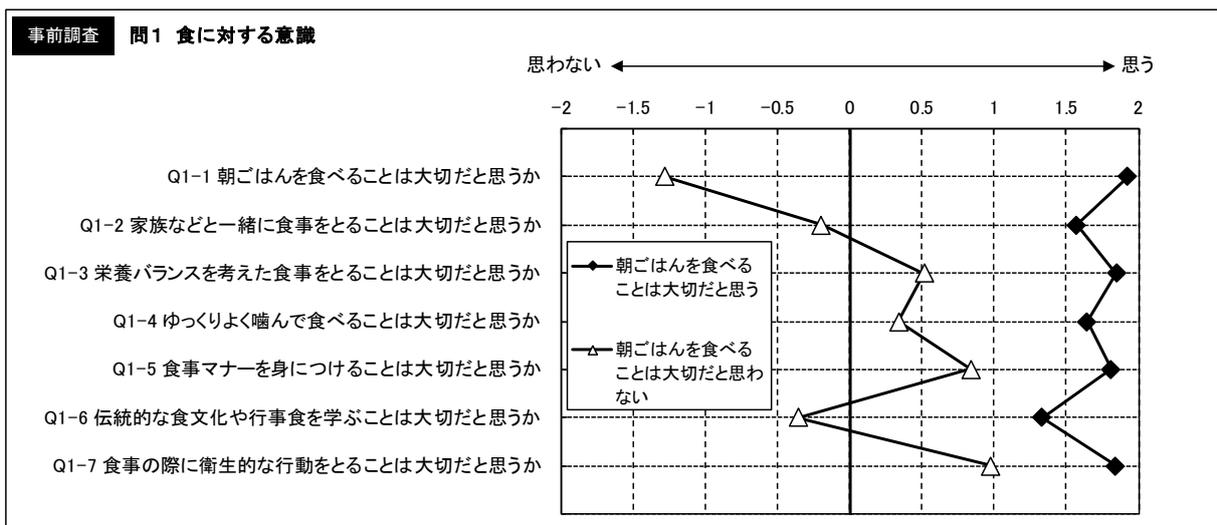
- ❖ 食に関する意識の7項目に対する回答のパターンから、児童生徒の食に関する意識の高さをレベル分け*して、その事前・事後での構成割合の変化をみると、食に関する意識が「とても高い」（7項目全てに対して「（大切だと）思う」と回答した）児童生徒の割合は、事前調査の40.1%から事後調査では42.4%に拡大している。
- ❖ 性別でみると、男女ともに意識が「とても高い」児童生徒の割合は拡大しているが、特に女子では3.1ポイントと男子よりも変化が大きい。
- ❖ 学校種別でみると、意識が「とても高い」児童生徒の割合は小学校低学年で最も高く50%を超えているほか、高校生は事前・事後で5ポイント拡大している。



*食に関する意識の高さは、問1-1～1-7の7項目に対する回答の組み合わせで以下のレベルに分けて集計した。
「とても高い」・・・7項目全てについて「（大切だと）思う」と回答
「高い」・・・7項目全てで「（大切だと）思う」又は「どちらかといえば（大切だと）思う」と回答
「やや高い」・・・7項目のうち「（大切だと）思う」又は「どちらかといえば（大切だと）思う」と回答した項目が4～6項目
「高くない」・・・7項目のうち「（大切だと）思う」又は「どちらかといえば（大切だと）思う」と回答した項目が3項目以下

■朝食摂取に対する意識とのクロス集計

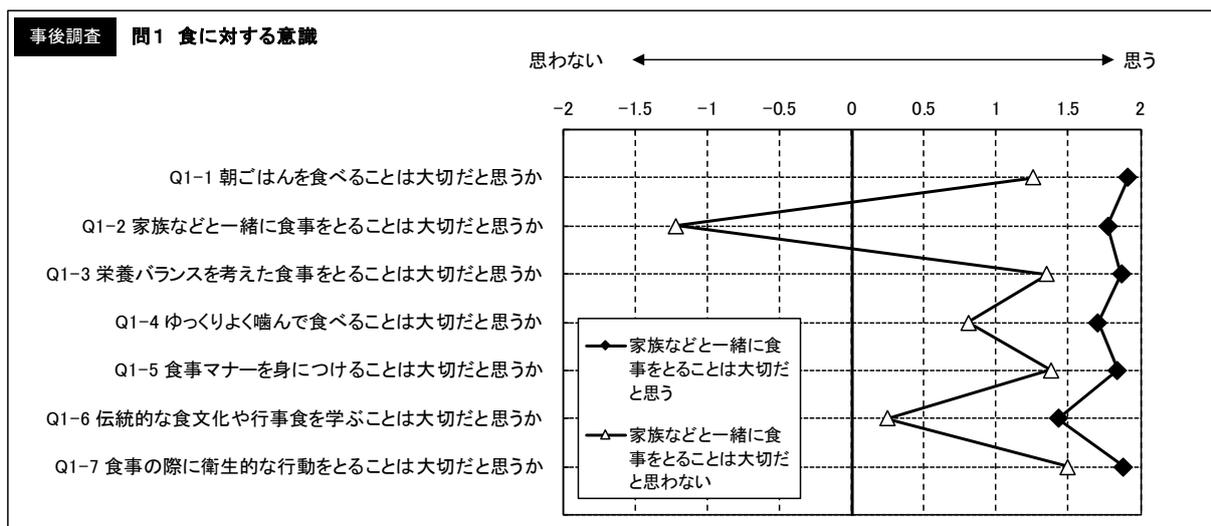
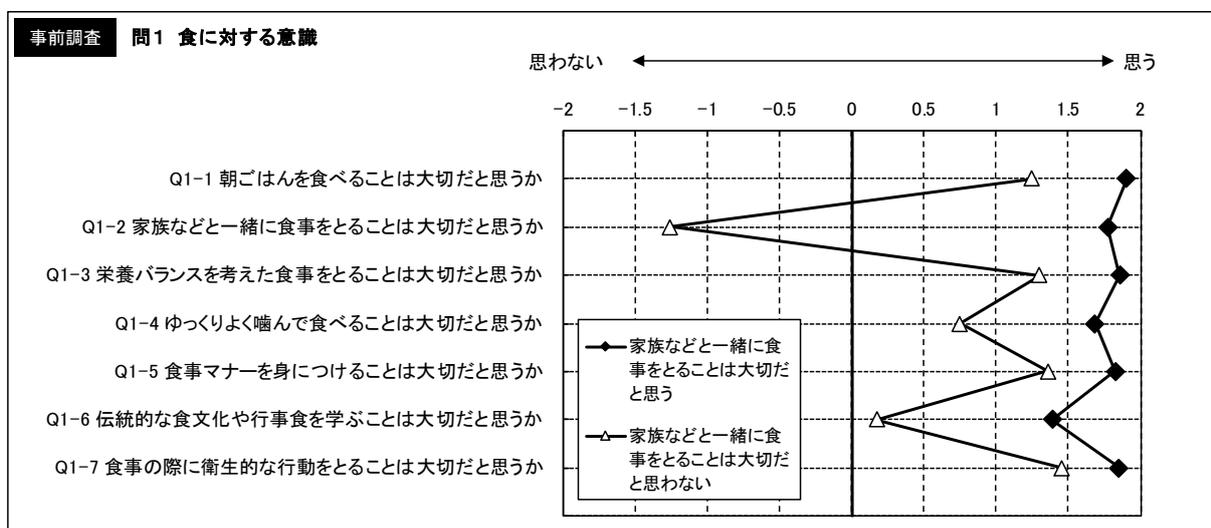
- ❖ 「朝ごはんを食べることは大切だと思うか」に対する回答から、朝食を摂取することが大切だと思う児童生徒（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答）と、大切だと思わない児童生徒（「あまり思わない」又は「思わない」と回答）に分け、それぞれのグループの食に対する意識を評点化*して比較した。
- ❖ 事前調査では、朝食を摂取することが大切だと思う児童生徒は総じて他の項目についても意識が高く、なかでも「栄養バランスを考えた食事をとること」や「食事マナーを身につけること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」について高い意識がみられる。一方、朝食を摂取することが大切だと思わない児童生徒では、「家族などと一緒に食事をとること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」についても評点がマイナス値、すなわち大切だと思わない傾向がみられる。
- ❖ 事後調査でも事前調査と同様の傾向がみられたが、朝食を摂取することが大切だと思わない児童生徒でも、「栄養バランスを考えた食事をとること」や「食事マナーを身につけること」、「食事の際に衛生的な行動をとること」については、事前調査と比べて若干ではあるが意識の高まりがみられる。



*各設問について、「思う」を+2、「どちらかといえば思う」を+1、「あまり思わない」を-1、「思わない」を-2として回答を評点化し、設問項目ごとに平均値（無回答を除く）を算出したもの。

■家族等との共食に対する意識とのクロス集計

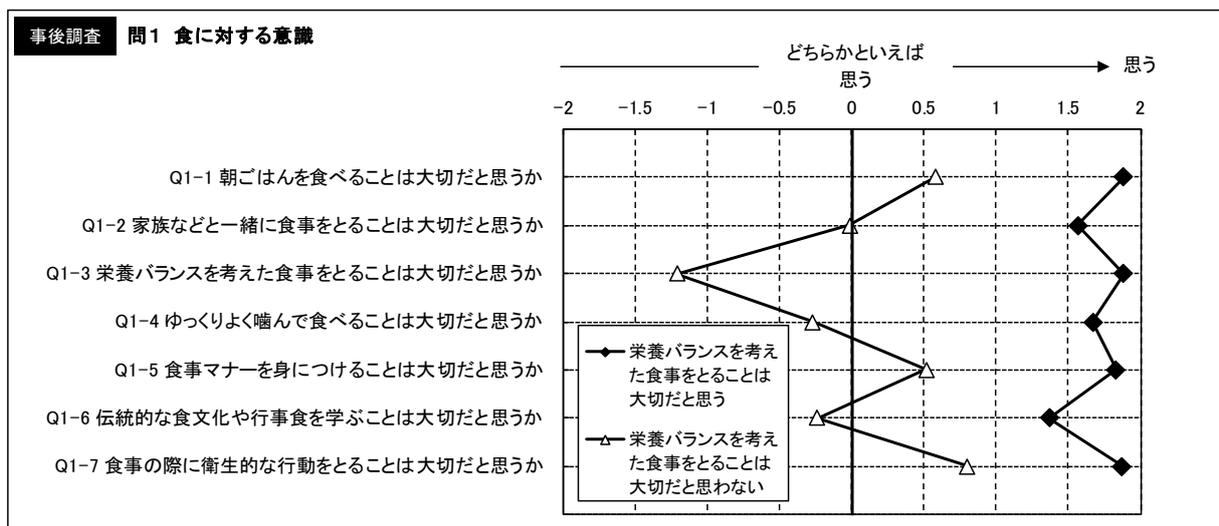
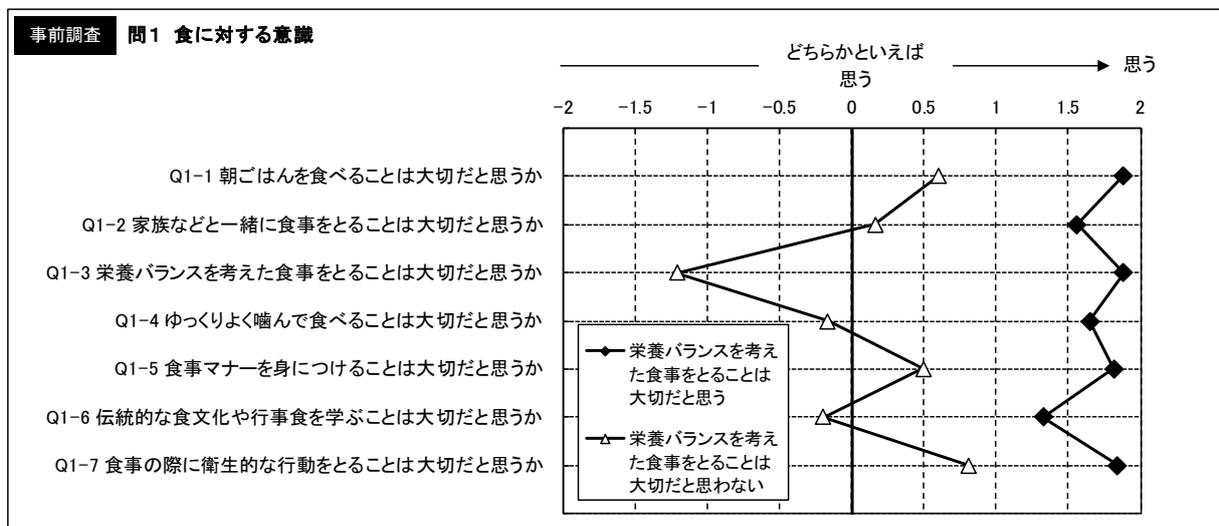
- ❖ 「家族などと一緒に食事をとることは大切だと思うか」に対する回答から、家族等との共食が大切だと思う児童生徒（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答）と、大切だと思わない児童生徒（「あまり思わない」又は「思わない」と回答）に分け、それぞれのグループの食に対する意識を評点化して比較した。
- ❖ 事前調査では、共食が大切だと思う児童生徒は「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」以外はすべて1.5ポイント以上と、総じて他の食に関する意識も高くなっている。一方、共食に対する意識が低い（大切だと思わない）児童生徒も、食に関するその他の項目については評点がプラス値、すなわち大切だと思う傾向がみられる。
- ❖ 事後調査でもこの傾向は変わらず、家族等との共食が大切だと思う児童生徒ほど、他の食に関する意識も高いことがわかる。



※各設問について、「思う」を+2、「どちらかといえば思う」を+1、「あまり思わない」を-1、「思わない」を-2として回答を評点化し、設問項目ごとに平均値（無回答を除く）を算出したもの。

■食事の栄養バランスに対する意識とのクロス集計

- ❖ 「栄養バランスを考えた食事をとること」について、大切だと思う児童生徒（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答）と、大切だと思わない児童生徒（「あまり思わない」又は「思わない」と回答）に分け、食に対する意識を評点化して比較した。
- ❖ その結果、総じて両グループの意識の開きが大きくなっており、なかでも「ゆっくりよく噛んで食べること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」については食事の栄養バランスに対する意識が低い（大切だと思わない）児童生徒でマイナス値、すなわち大切だと思わない児童生徒が多い結果となっている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、栄養バランスを考えた食事が大切だと思う児童生徒ほど、他の食に関する意識も高くなっている。

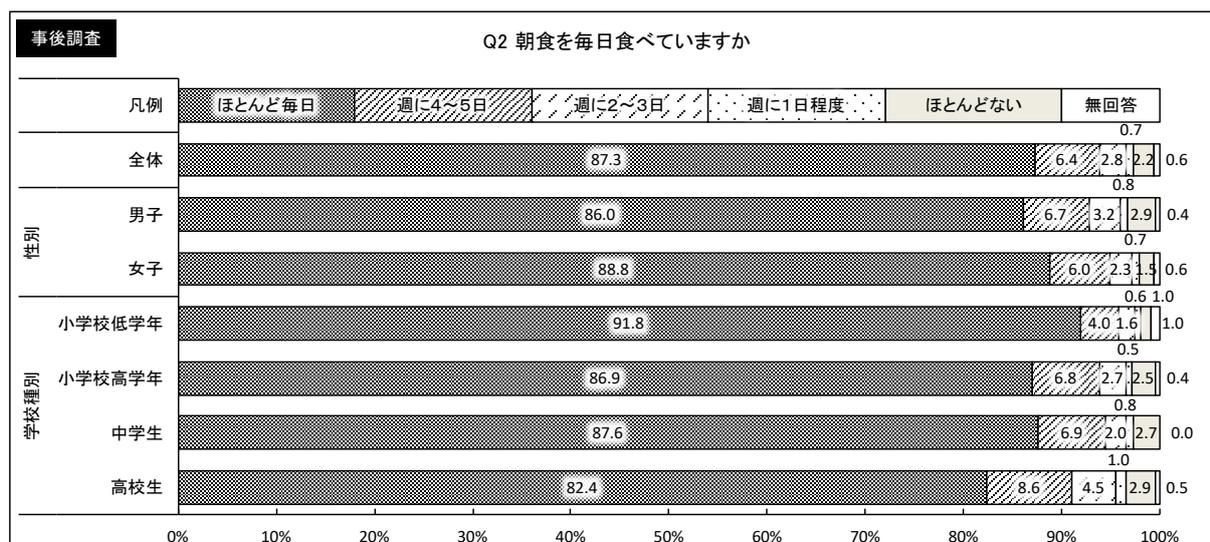
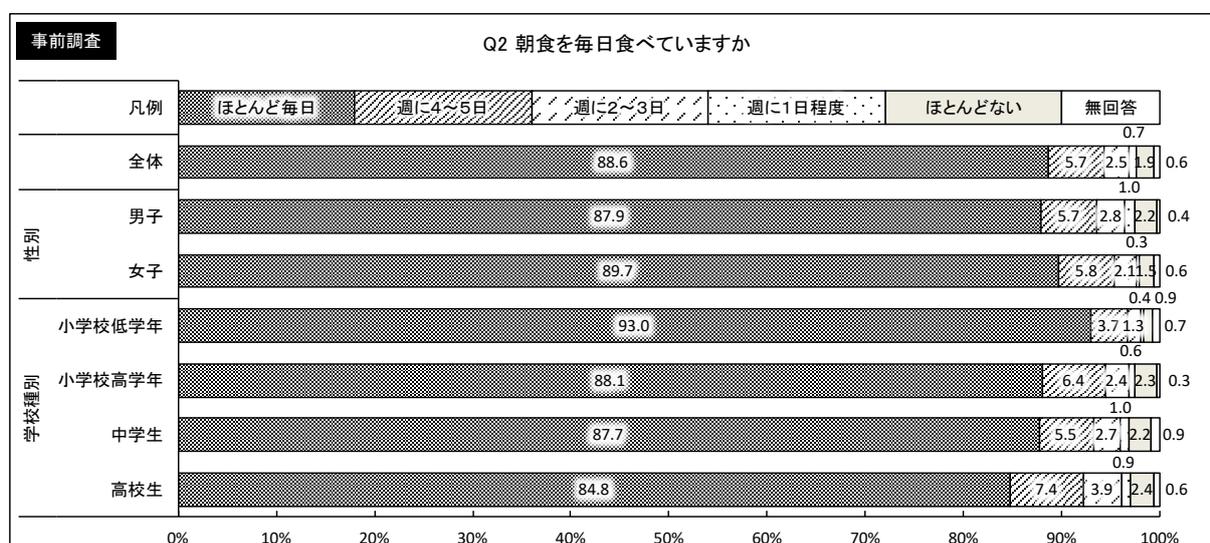


※各設問について、「思う」を+2、「どちらかといえば思う」を+1、「あまり思わない」を-1、「思わない」を-2として回答を評点化し、設問項目ごとに平均値（無回答を除く）を算出したもの。

(3) 朝食の摂取状況

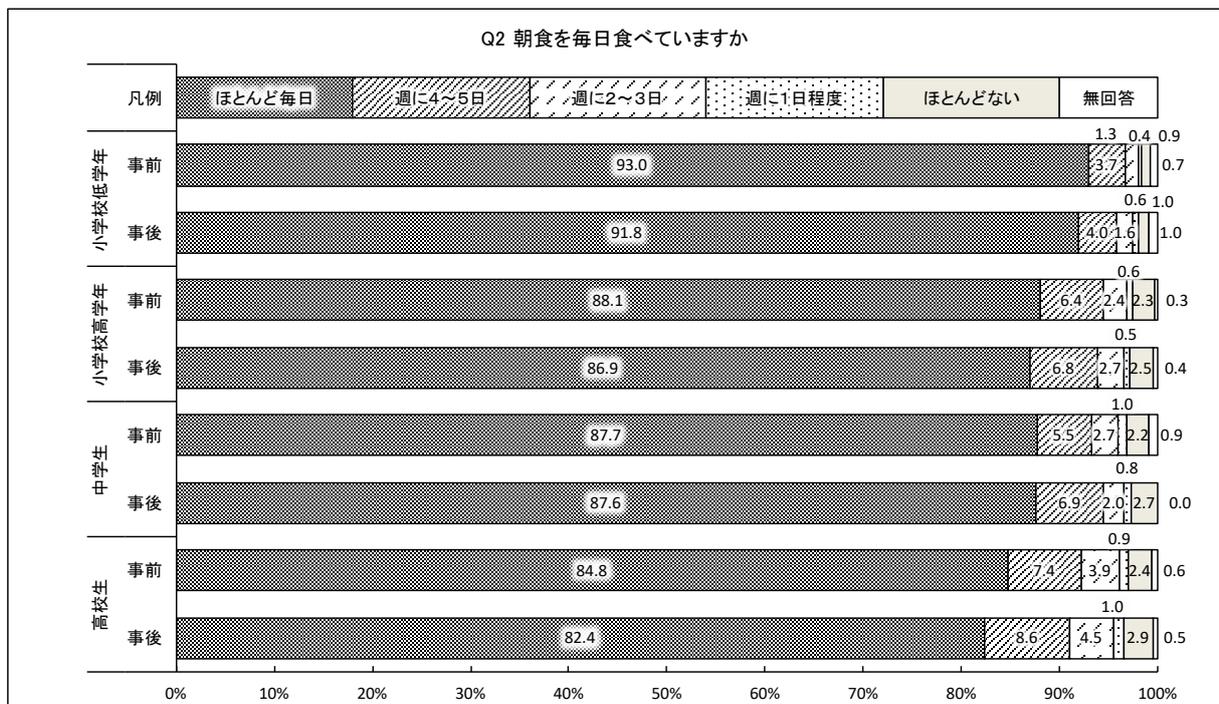
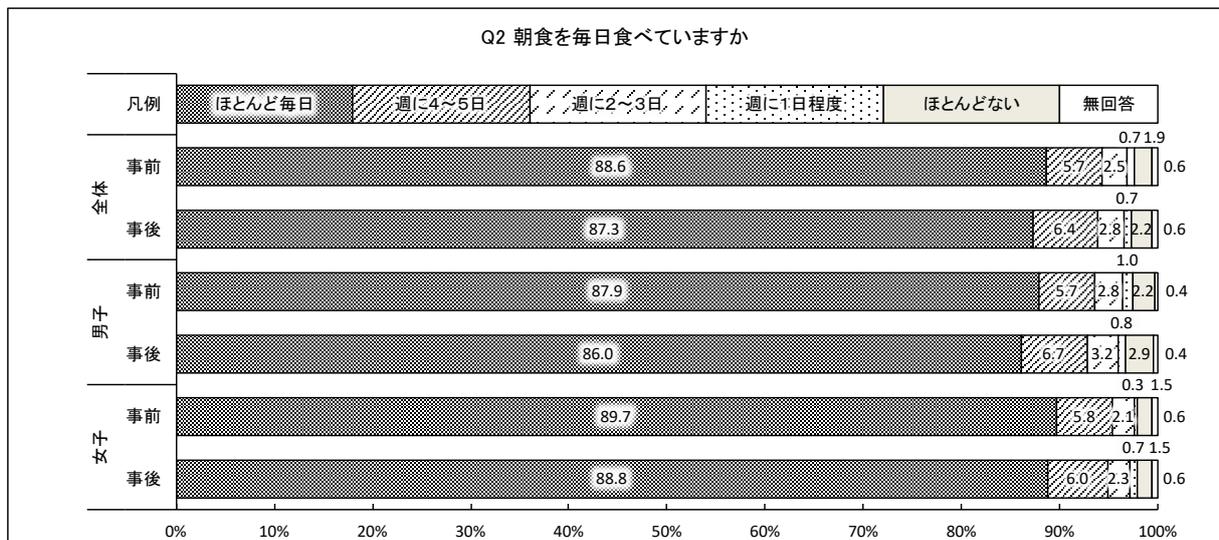
■全体及び性別・学校種別

- ❖ 朝食については、事前調査では全体の88.6%の児童生徒が「ほとんど毎日」食べているとしており、「週に4～5日」と合わせると94.3%となっている。
- ❖ 性別で見ると、男子よりも女子の方が朝食の摂取状況はよい。また学校種別で見ると、最も朝食摂取状況がよいのは小学校低学年で、「ほとんど毎日」の割合が93.0%と高くなっている。
- ❖ 一方、事後調査では、「ほとんど毎日」食べている児童生徒の割合は全体で87.3%であり、事前調査よりはわずかに下がっているものの高い水準で維持されている。
- ❖ 性別で見ると、事前調査と同様、男子よりも女子の方が朝食の摂取状況はよい。また学校種別でも事前調査と同様、小学校低学年の朝食摂取状況が最もよかった。



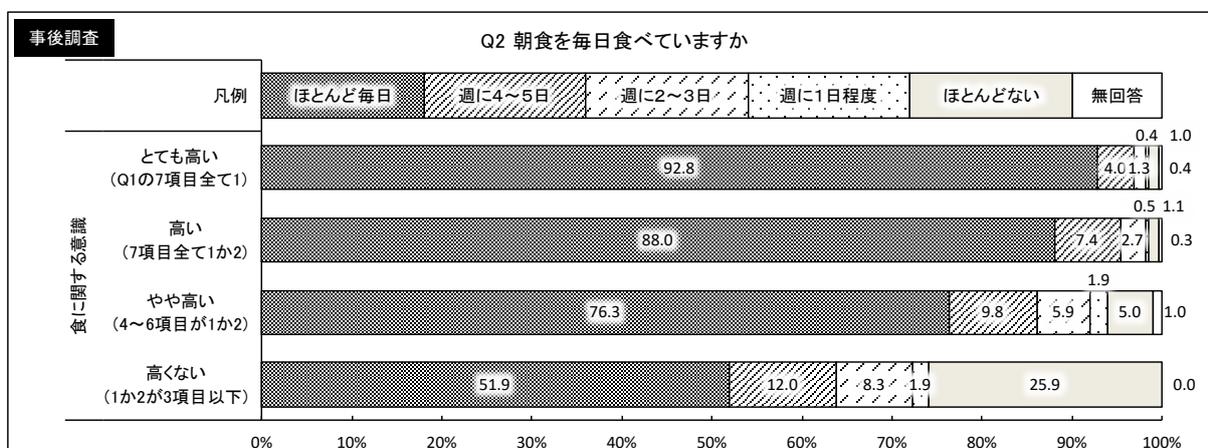
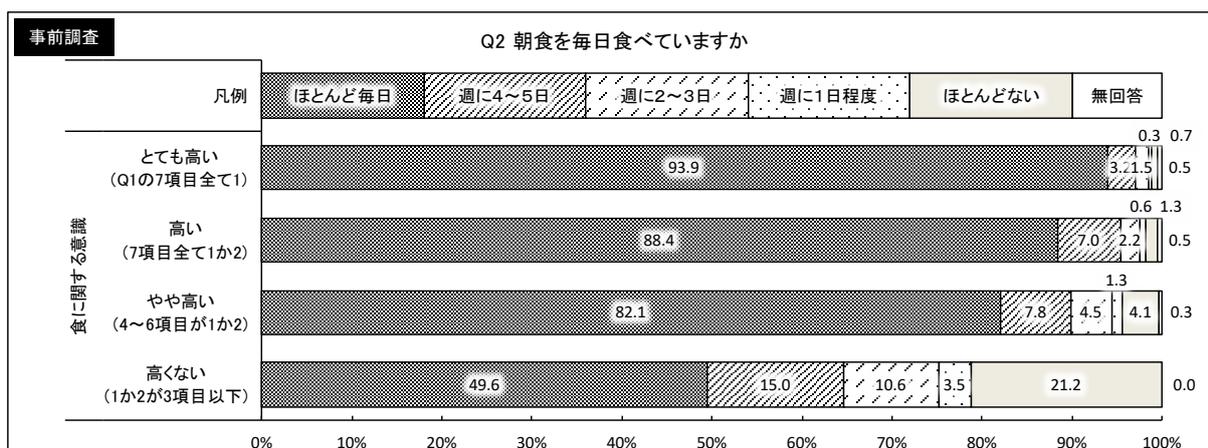
■事前調査と事後調査での朝食摂取状況の変化

- ❖ 朝食の摂取状況について事前調査と事後調査で比較すると、全体では「ほとんど毎日」の割合は事後調査において1.3ポイント下がり、「週に4～5日」の割合が0.7ポイント上がっている。
- ❖ 性別で事前・事後を比較すると、男女とも全体傾向と同様、「ほとんど毎日」の割合が下がり、「週に4～5日」の割合が上がっている。また男子では「ほとんどない」の割合が事前調査より事後調査で0.7ポイント上がっている。
- ❖ 学校種別でみると、中学生では週に4日以上朝食を食べる（「ほとんど毎日」又は「週に4～5日」と回答した）生徒の割合は事前調査の93.2%から事後調査では94.5%と上がっている。



■食に関する意識とのクロス集計

- ❖ 問1の回答から、食に関する意識の高さでグループ分け*した上で、それぞれの朝食の摂取状況を比較した。
- ❖ その結果、食に関する意識の高さと朝食摂取状況には相関がみられ、意識が「とても高い」グループでは「ほとんど毎日」朝食を食べている割合が93.9%と90%を超えているのに対して、意識が「高くない」グループではその割合は49.6%と50%に満たず、逆に「ほとんどない」が21.2%と高くなっている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、食に関する意識が高いグループほど朝食の摂取状況がよいことがわかる。

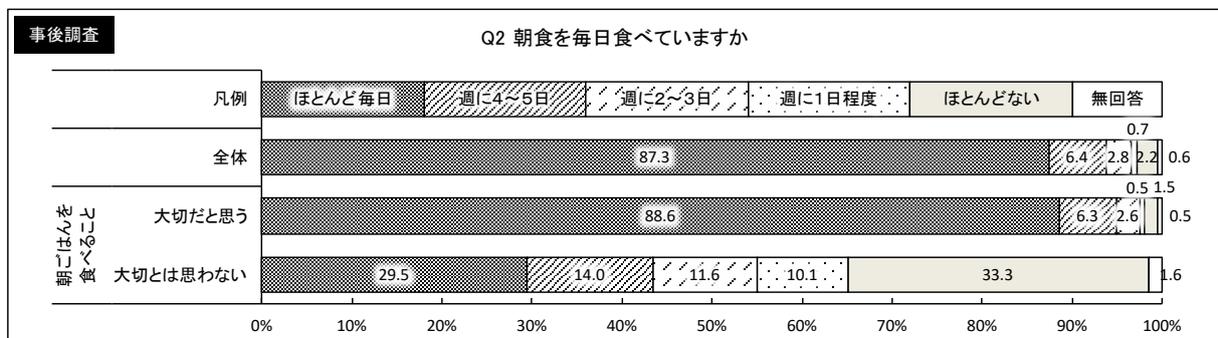
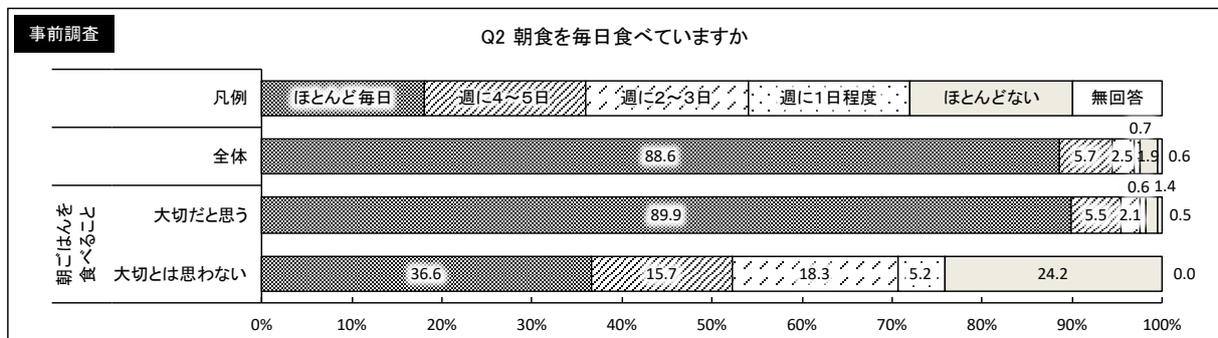


※Q1-1～Q1-7の各設問への回答から、食に関する意識の高さを以下の4段階に分類した。

- ①「とても高い」…Q1-1～Q1-7の全てに「1 思う」と回答した児童生徒
- ②「高い」…Q1-1～Q1-7の全てに「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した児童生徒
- ③「やや高い」…Q1-1～Q1-7のうち4～6項目で「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した児童生徒
- ④「高くない」…Q1-1～Q1-7で「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した項目が3項目以下の児童生徒

■朝食を食べることに対する意識とのクロス集計

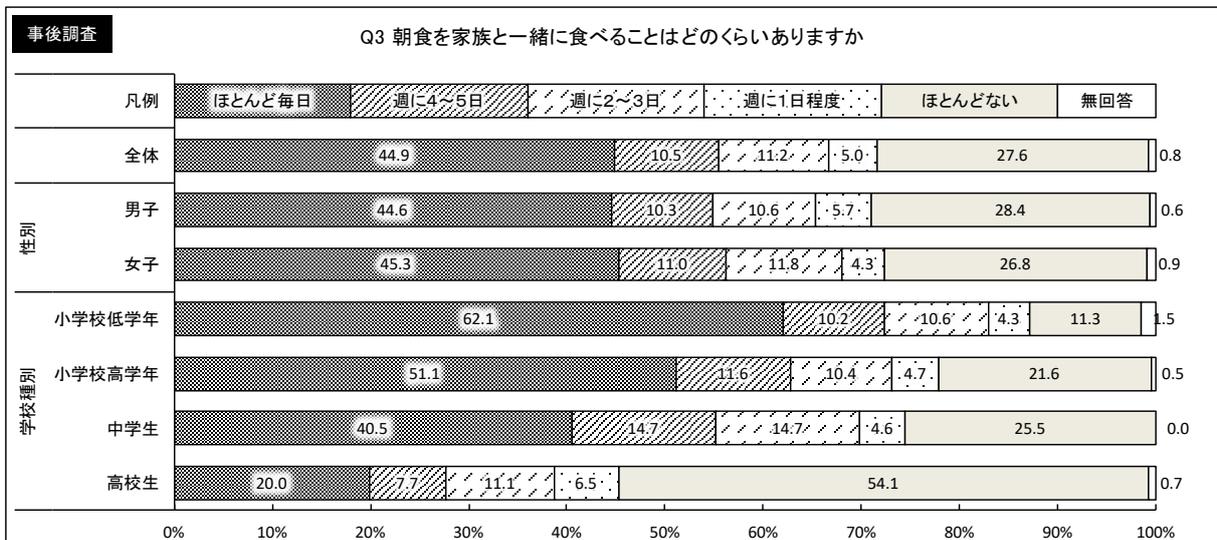
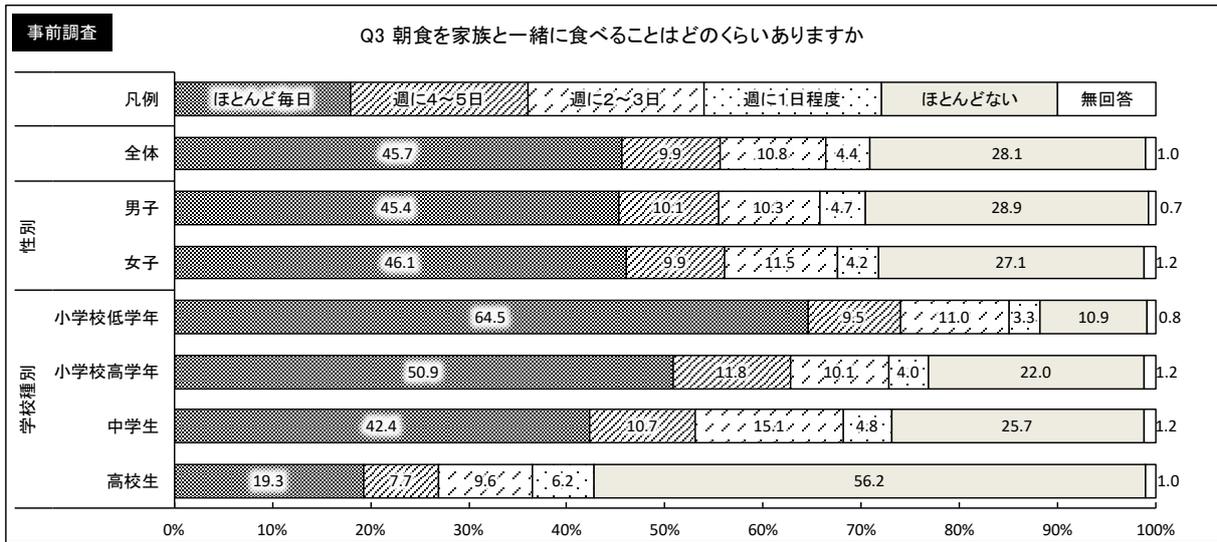
- ❖ 問1の食に関する意識のうち、特に問1-1「朝ごはんを食べることは大切だと思うか」に対する回答から、朝食を食べることについて大切だと思う（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した）児童生徒と、大切とは思わない（「あまり思わない」又は「思わない」と回答した）児童生徒に分けて、それぞれの朝食の摂取状況を比較した。
- ❖ その結果、両グループには大きな差がみられ、事前調査では、朝食を食べることが大切だと思う児童生徒の約9割が「ほとんど毎日」朝食を食べているのに対し、大切とは思わない児童生徒では「ほとんど毎日」朝食を食べているのは36.6%で、朝食を食べることが「ほとんどない」という割合が24.2%と高くなっている。
- ❖ 事後調査でも事前調査と同様の傾向がみられ、さらに朝食を食べることが大切だと思う児童生徒と大切とは思わない児童生徒の間での「ほとんど毎日」朝食を食べる割合の開きが事前調査よりも大きくなっている。



(4) 朝食の共食状況

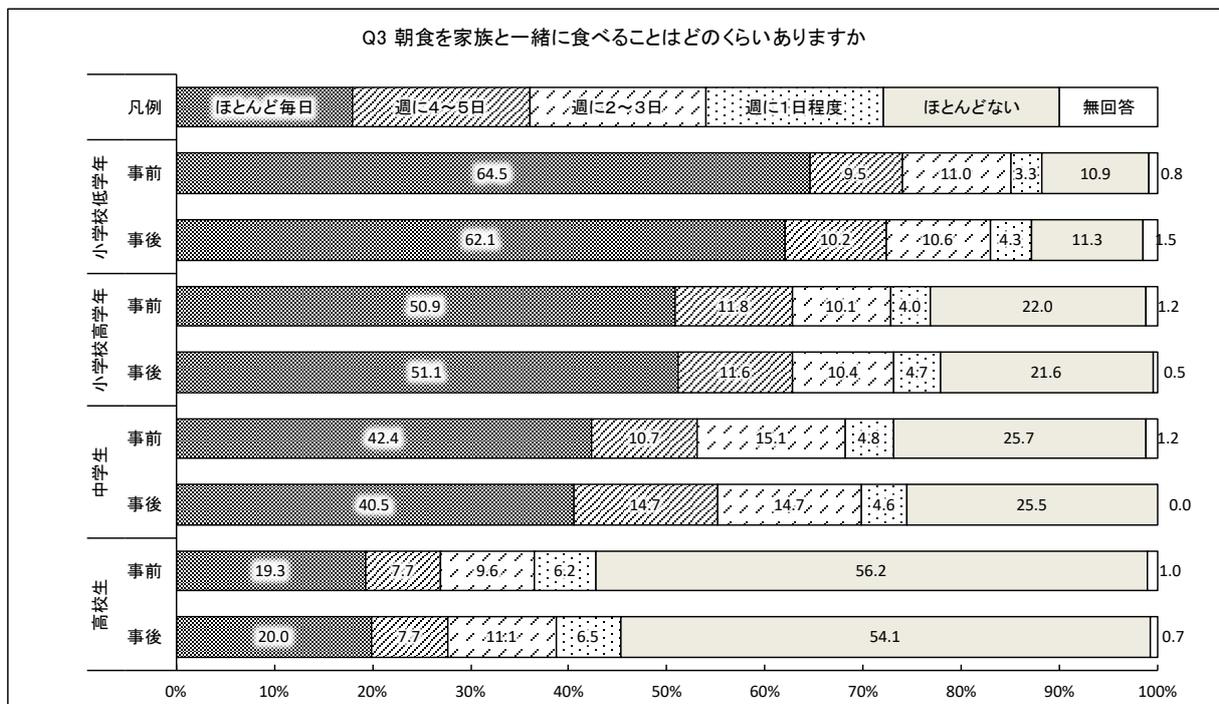
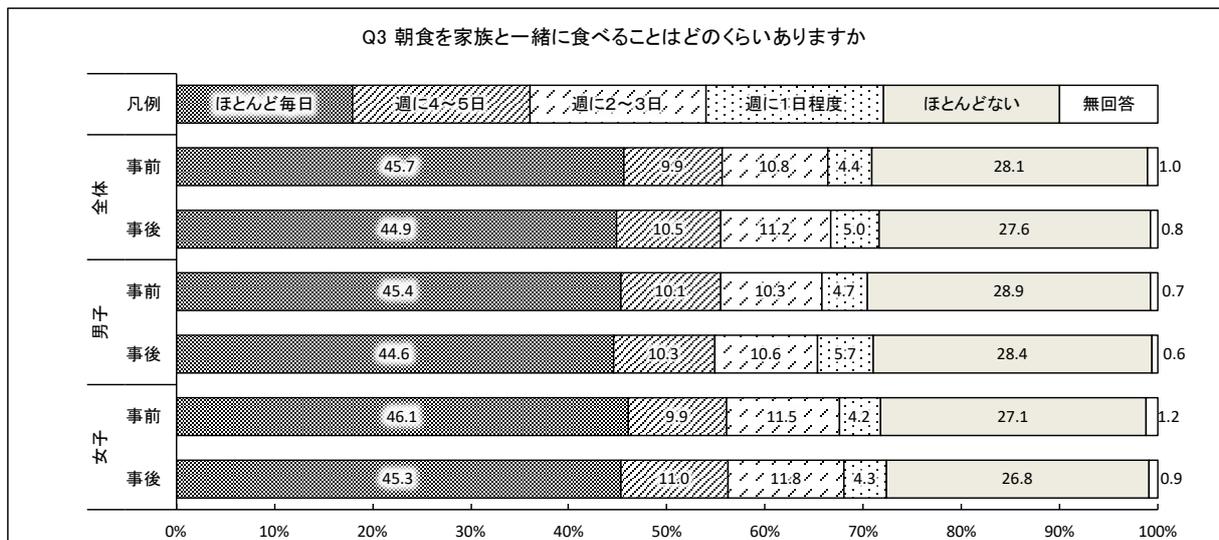
■全体及び性別・学校種別

- ❖ 朝食の共食状況をみると、事前調査では「ほとんど毎日」家族と一緒に食べるという児童生徒は45.7%で、「週に4～5日」と合わせると55.6%が週に4日以上は朝食を家族と一緒に食べている。
- ❖ 性別ではほとんど差は見られないが、学校種別では大きな差がみられ、学年が上がるにつれて共食割合が低くなる傾向がみられる。小学校低学年では74.0%が週4日以上は家族と一緒に朝食を食べているのに対して、高校生では「ほとんど毎日」は19.3%であり、「ほとんどない」が56.2%と半数以上を占めている。
- ❖ 事後調査も事前調査とほぼ同様の結果となっており、「ほとんど毎日」家族と一緒に食べるという児童生徒は44.9%で、「週に4～5日」と合わせると55.4%が週に4日以上は朝食を家族と一緒に食べているとしている。
- ❖ 学校種別の結果も事前調査と同様の傾向がみられ、学年が低いほど朝食の共食割合が高くなっている。



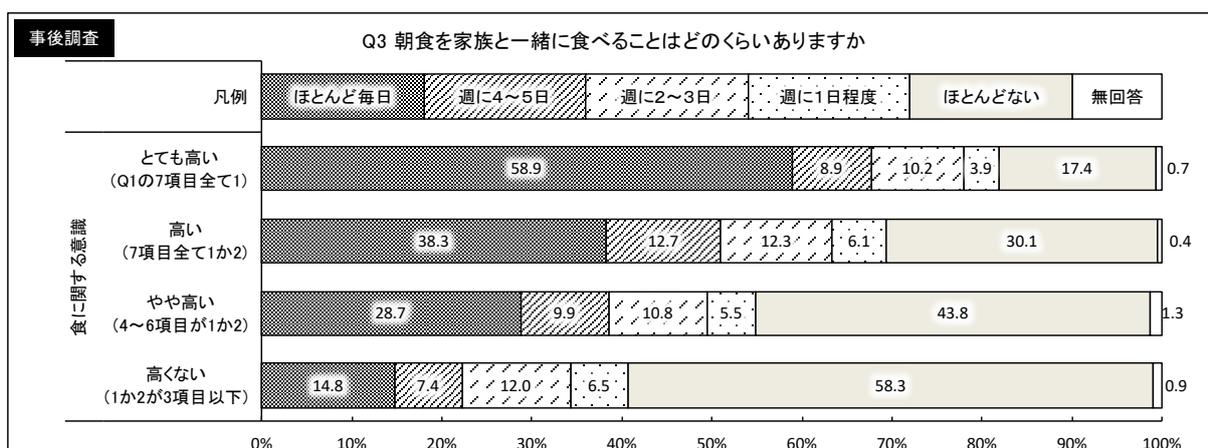
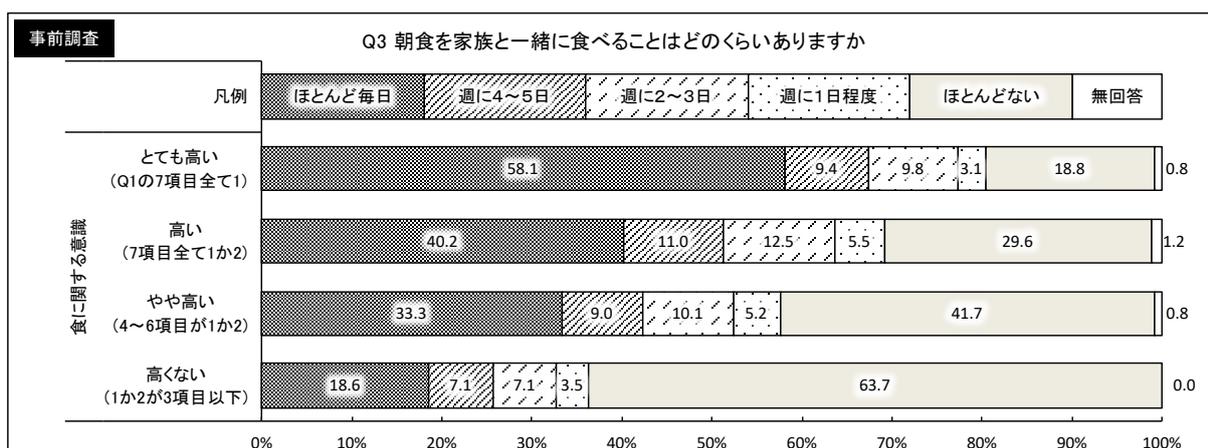
■事前調査と事後調査での朝食摂取状況の変化

- ❖ 朝食の共食状況について事前調査と事後調査で比較すると、全体では「ほとんど毎日」の割合は事後調査において0.8ポイント下がり、「週に4～5日」の割合が0.6ポイント上がっている。また、朝食を家族と一緒に食べるのが「ほとんどない」という割合は事前調査より事後調査で0.5ポイント下がっている。
- ❖ 性別で事前・事後を比較すると、男女とも全体傾向と同様、「ほとんど毎日」の割合がやや下がり、「週に4～5日」の割合が上がっている。
- ❖ 学校種別で事前・事後を比較すると、特に中学生と高校生では、週に4日以上朝食を家族と一緒に食べる（「ほとんど毎日」又は「週に4～5日」と回答した）生徒の割合が拡大しており、中学生では2.1ポイント、高校生では0.7ポイント上がっている。



■食に関する意識とのクロス集計

- ❖ (3)の朝食摂取状況と同様、問1の回答から、食に関する意識の高さでグループ分け*した上で、それぞれの朝食の摂取状況を比較すると、意識が高いほど朝食の共食割合も高いという相関がみられる。
- ❖ 事前調査では、「ほとんど毎日」朝食を家族と一緒に食べている割合は、食に関する意識が「とても高い」グループでは58.1%であるが、食に関する意識が低くなるにつれてその割合も小さくなり、意識が「高くない」グループでは18.6%と20%に満たない。逆に朝食を家族と一緒に食べることは「ほとんどない」という割合は、食に関する意識が低くなるにつれて大きくなり、意識が「高くない」グループでは63.7%と60%を超えている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、食に関する意識が「とても高い」グループでは「ほとんど毎日」が58.9%と事前調査よりも高い割合となっている。また食に関する意識が「高くない」グループでも、朝食を家族と一緒に食べるのが「ほとんどない」という割合が事前調査の63.7%から事後調査では58.3%に下がるなど、朝食の共食状況に改善がみられる。

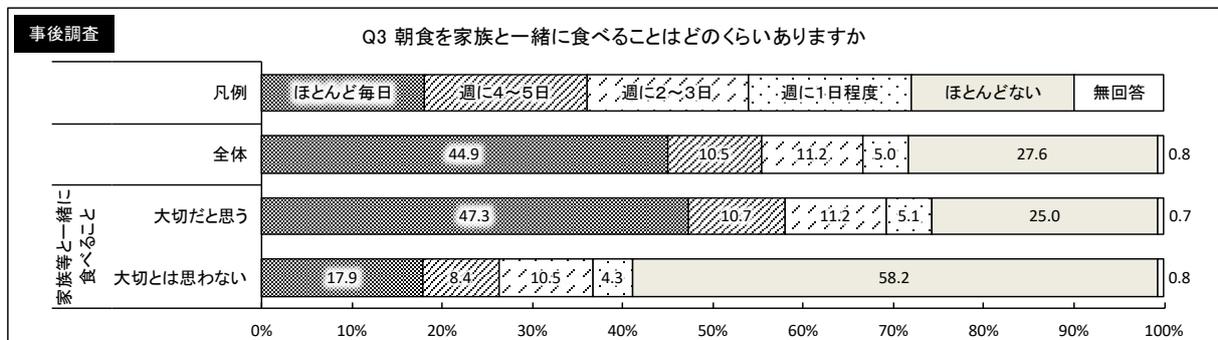
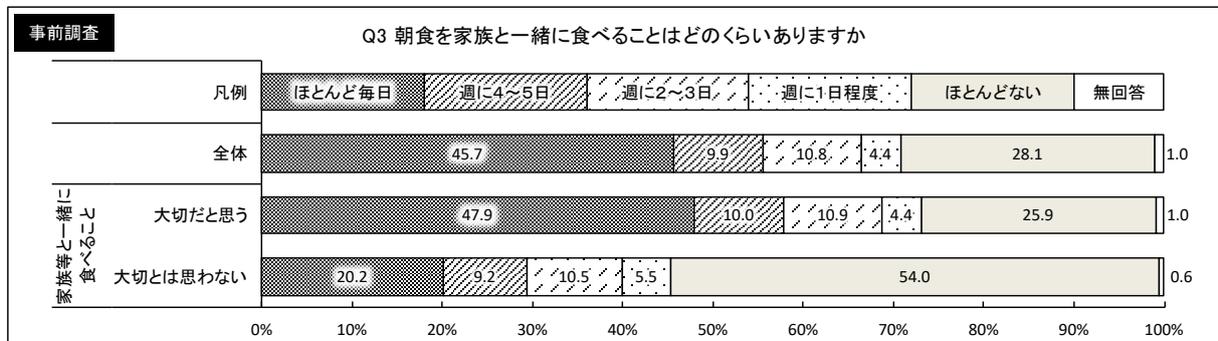


*Q1-1~Q1-7の各設問への回答から、食に関する意識の高さを以下の4段階に分類した。

- ①「とても高い」…Q1-1~Q1-7の全てに「1 思う」と回答した児童生徒
- ②「高い」…Q1-1~Q1-7の全てに「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した児童生徒
- ③「やや高い」…Q1-1~Q1-7のうち4~6項目で「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した児童生徒
- ④「高くない」…Q1-1~Q1-7で「1 思う」又は「2 どちらかといえば思う」と回答した項目が3項目以下の児童生徒

■家族等と一緒に食事をとることに対する意識とのクロス集計

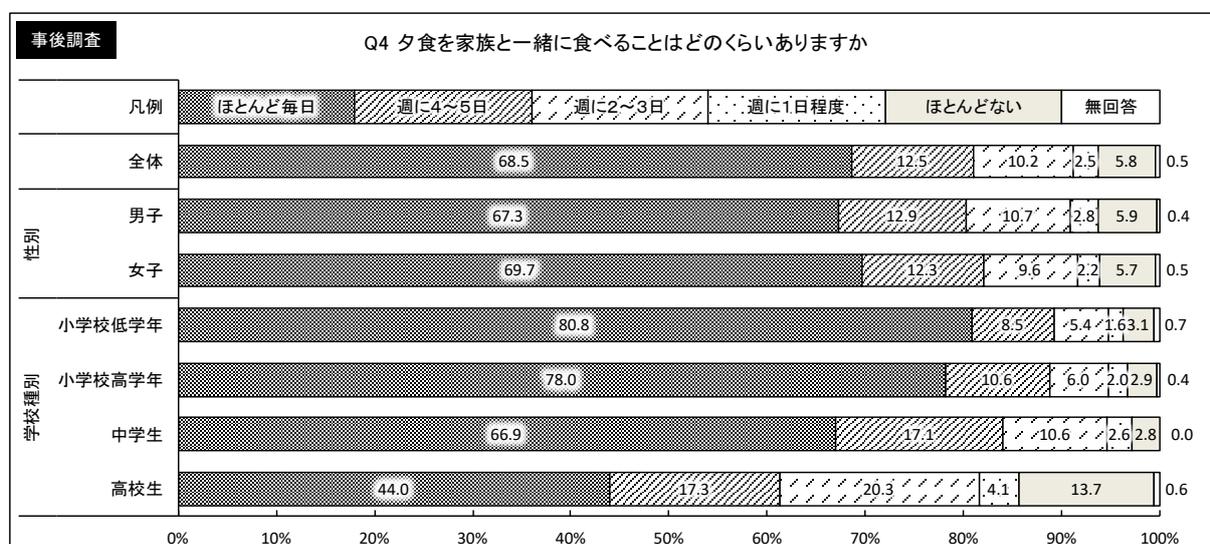
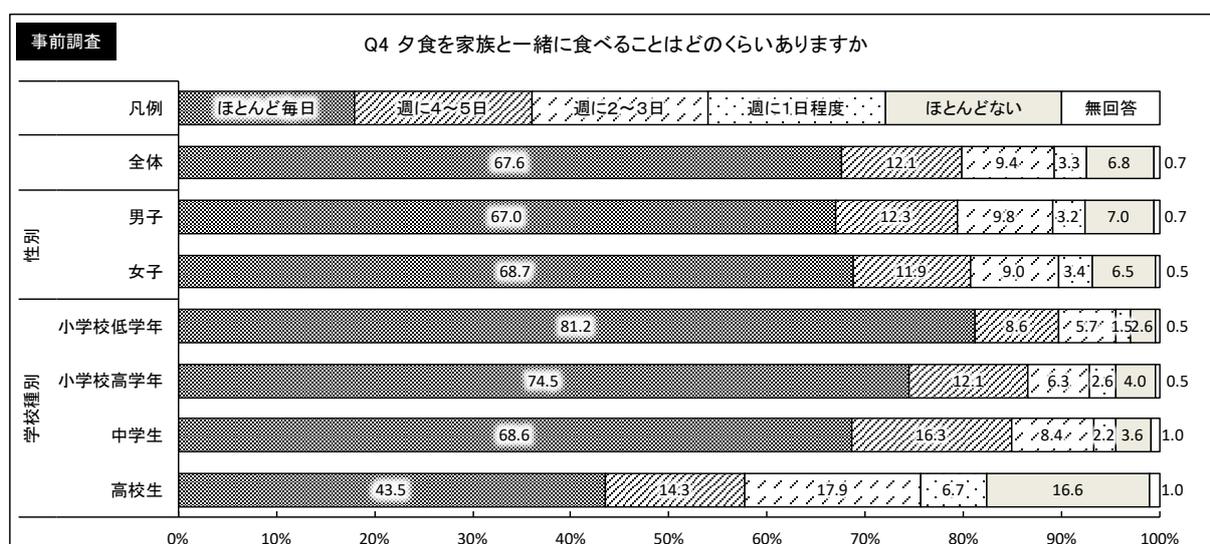
- ❖ 問1の食に関する意識のうち、特に問1-2「家族などと一緒に食事をとること」について、大切だと思う（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した）児童生徒と、大切とは思わない（「あまり思わない」又は「思わない」と回答した）児童生徒に分けて、それぞれの朝食における共食状況を比較した。
- ❖ その結果、両グループには大きな差がみられ、事前調査では、共食が大切だと思う児童生徒の約半数（47.9%）が「ほとんど毎日」朝食を家族と一緒に食べているのに対し、大切とは思わない児童生徒では、半数以上（54.0%）が朝食を家族と一緒に食べるのが「ほとんどない」と回答している。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、さらに共食が大切だと思う児童生徒と大切とは思わない児童生徒の間で、「ほとんど毎日」朝食を家族と一緒に食べる割合の開きが事前調査よりも事後調査でより大きくなっている。



(5) 夕食の共食状況

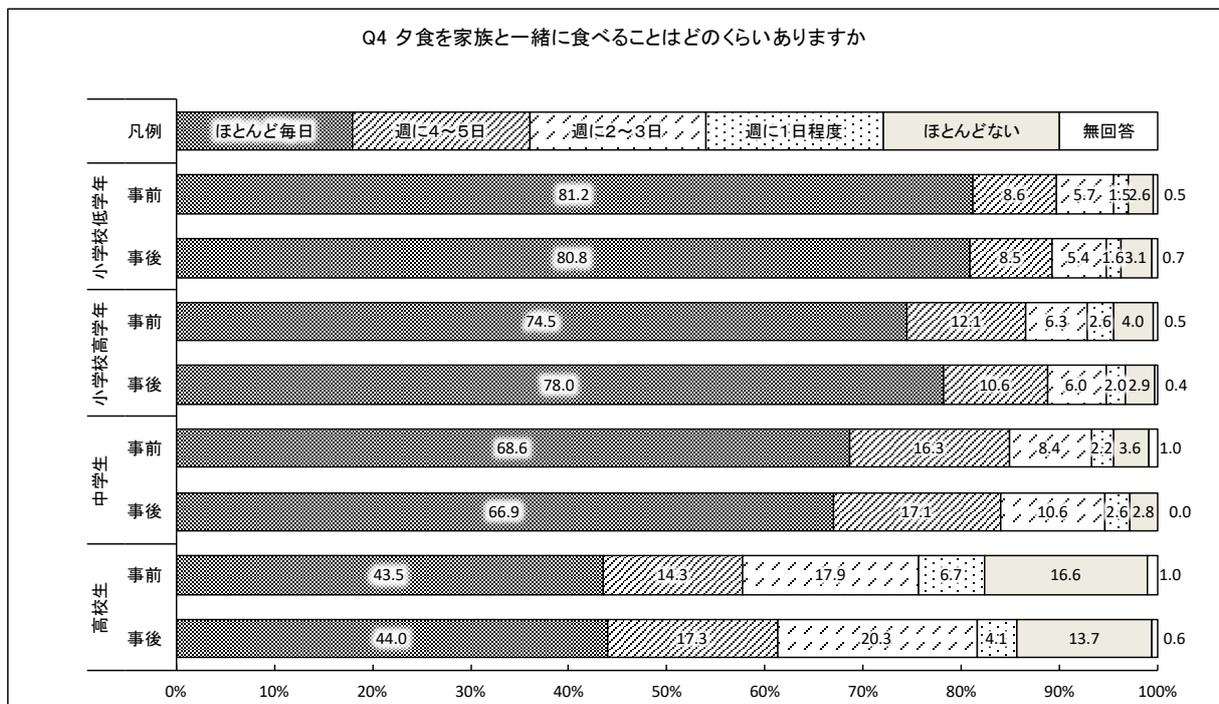
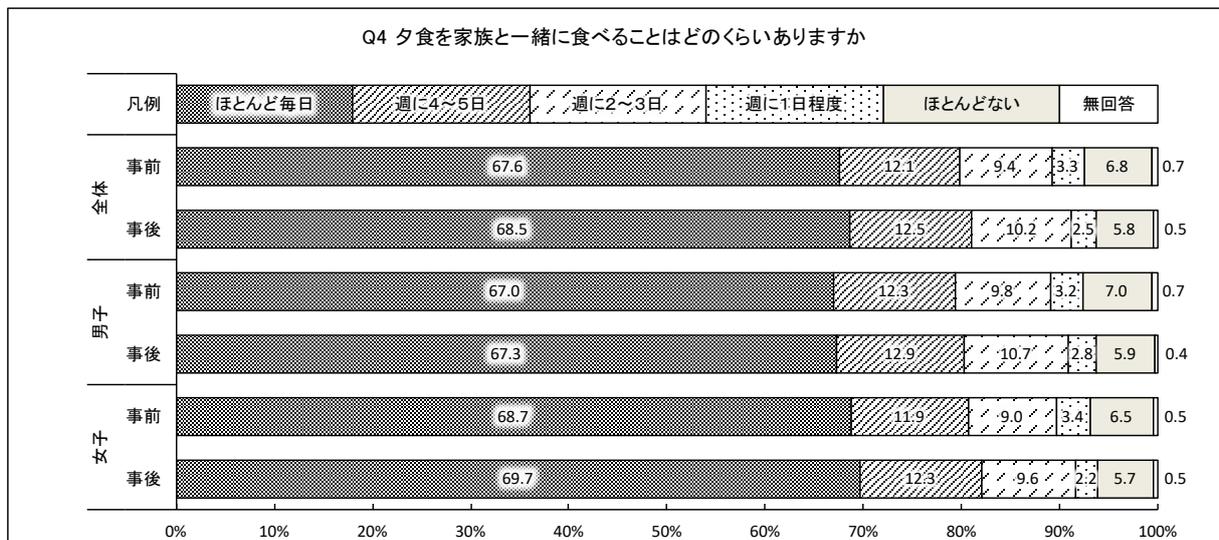
■全体及び性別・学校種別

- ❖ 夕食の共食状況を見ると、事前調査では「ほとんど毎日」家族と一緒に食べるという児童生徒は67.6%で、「週に4～5日」と合わせると、79.7%が週に4日以上は夕食を家族と一緒に食べている。
- ❖ 朝食の共食状況と同様、性別ではほとんど差は見られないが、学校種別では大きな差がみられ、学年が上がるにつれて共食割合が低くなる傾向がみられる。小学校低学年では90%近くが週4日以上は家族と一緒に夕食を食べているのに対して、高校生では「ほとんど毎日」は50%に満たず、「ほとんどない」が16.6%と高い割合になっている。
- ❖ 事後調査でも事前調査とほぼ同様の結果となっており、「ほとんど毎日」夕食を家族と一緒に食べるという児童生徒は全体では68.5%で、「週に4～5日」と合わせると81.0%が週に4日以上は朝食を家族と一緒に食べているとしている。
- ❖ 学校種別の結果も事前調査と同様の傾向がみられ、学年が低いほど夕食の共食割合が高くなっている。



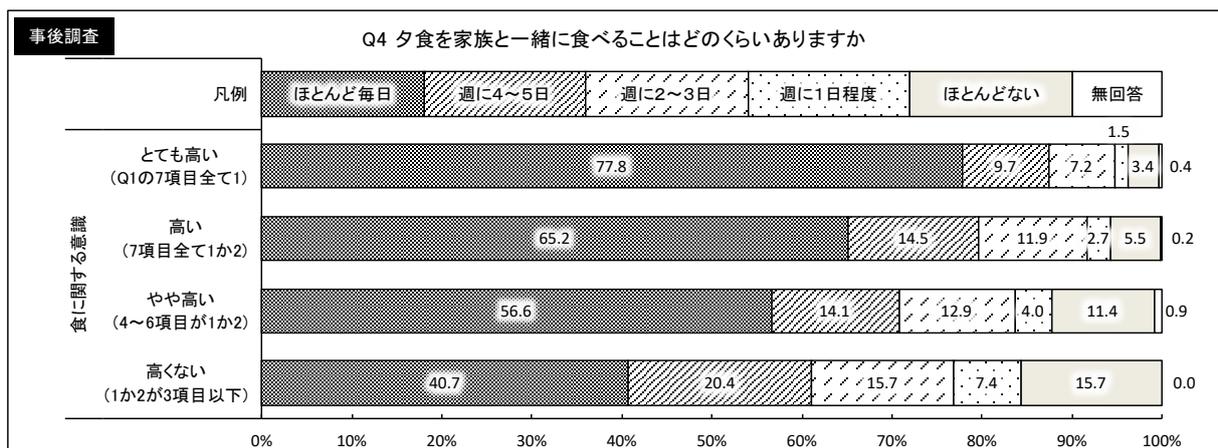
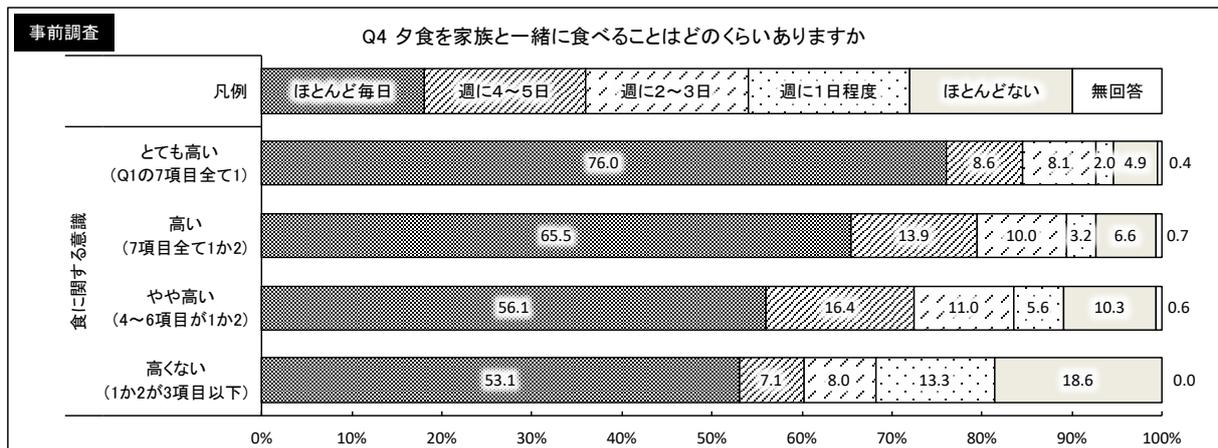
■事前調査と事後調査での夕食摂取状況の変化

- ❖ 夕食の共食状況について事前調査と事後調査で比較すると、全体では「ほとんど毎日」の割合は事後調査において0.9ポイント上がり、「週に4～5日」の割合も0.4ポイント上がっている。また夕食を家族と一緒に食べることが「ほとんどない」という割合は事前調査より事後調査で1.0ポイント下がっている。
- ❖ 性別で事前・事後を比較すると、男女とも全体傾向と同様、「ほとんど毎日」及び「週に4～5日」の割合が上がっている。
- ❖ 学校種別で事前・事後を比較すると、小学校高学年では「ほとんど毎日」の割合が3.5ポイント上がっているほか、高校生では夕食を家族と一緒に食べることが「ほとんどない」という割合が事前調査より事後調査で2.9ポイント下がっている。



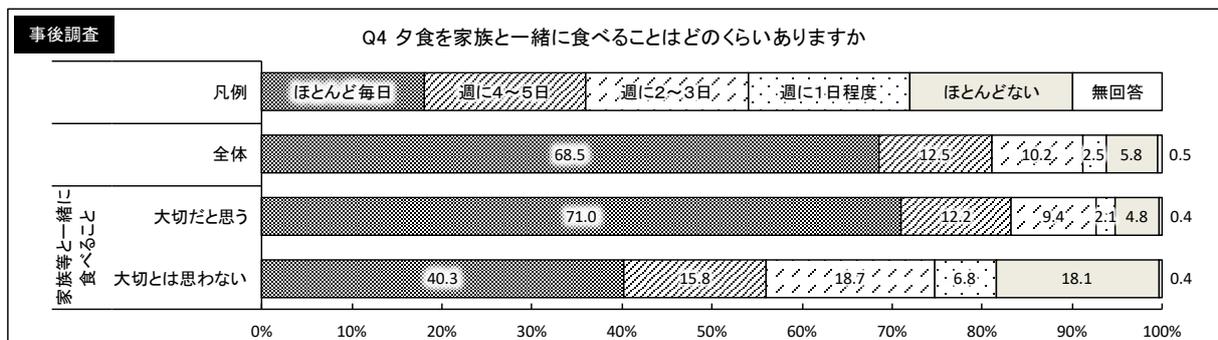
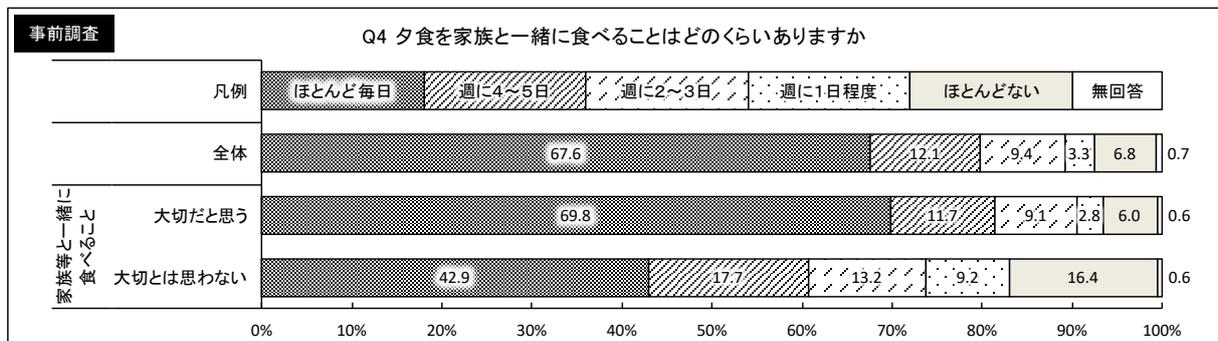
■食に関する意識とのクロス集計

- ❖ (4) の朝食の共食状況と同様、食に関する意識の高さ別で夕食の共食状況をみると、朝食と同様、食に関する意識が高いほど夕食の共食割合も高いという相関がみられる。
- ❖ 「ほとんど毎日」夕食を家族と一緒に食べている割合は、食に関する意識が「とても高い」グループでは76.0%であるが、食に関する意識が低くなるにつれてその割合も小さくなり、意識が「高くない」グループでは53.1%である。逆に夕食を家族と一緒に食べることは「ほとんどない」という割合は、食に関する意識が低くなるにつれて大きくなる傾向がみられ、意識が「高くない」グループでは18.6%と、「とても高い」グループ(4.9%)と10ポイント以上の開きがみられる。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、食に関する意識が「とても高い」グループでは「ほとんど毎日」が77.8%と事前調査よりも高い割合となっている。また食に関する意識が「高くない」グループでも、夕食を家族と一緒に食べるのが「ほとんどない」という割合が事前調査の18.6%から事後調査では15.7%に下がるなど、夕食の共食状況に改善がみられる。



■家族等と一緒に食事をとることに対する意識とのクロス集計

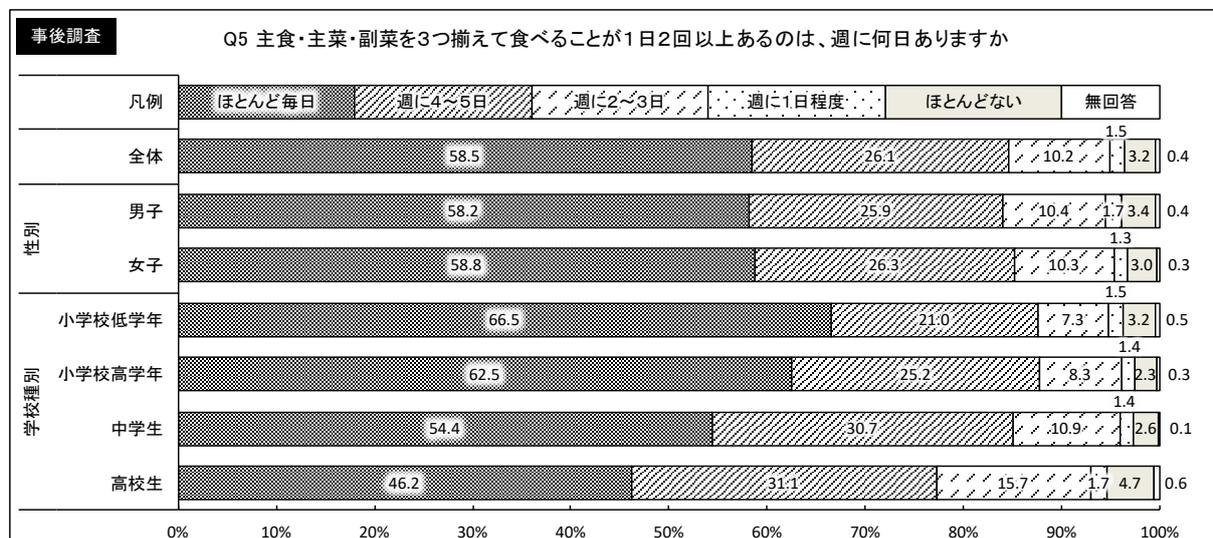
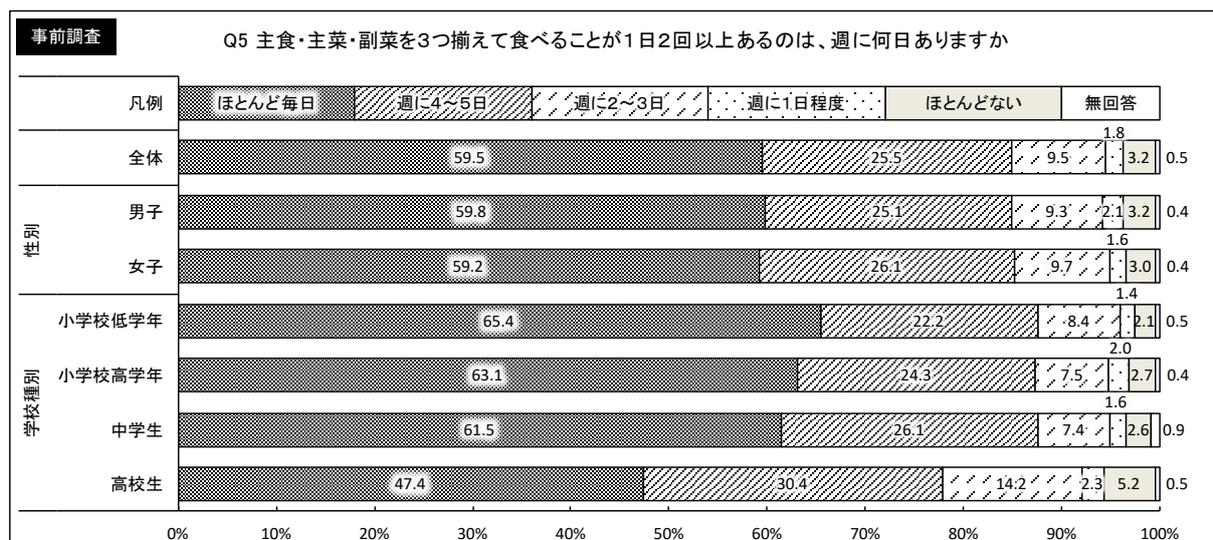
- ❖ 問1の食に関する意識のうち、特に問1-2「家族などと一緒に食事をとること」について、大切だと思う（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した）児童生徒と、大切とは思わない（「あまり思わない」又は「思わない」と回答した）児童生徒に分けて、それぞれの夕食における共食状況を比較したところ、朝食の共食状況と同様、大切だと思う児童生徒の方が夕食の共食割合も高いという傾向がみられた。
- ❖ 事前調査では、共食が大切だと思う児童生徒の7割近く（69.8%）が「ほとんど毎日」夕食を家族と一緒に食べているのに対し、大切とは思わない児童生徒では、その割合は42.9%と5割に満たず、夕食を家族と一緒に食べることが「ほとんどない」という割合が16.4%と高くなっている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられており、さらに共食が大切だと思う児童生徒と大切とは思わない児童生徒を比べると、「ほとんど毎日」夕食を家族と一緒に食べる割合や、逆に夕食を家族と一緒に食べることが「ほとんどない」という割合について、事前調査よりも事後調査でより開きが大きくなっている。



(6) 栄養バランスを考えた食事の摂取状況

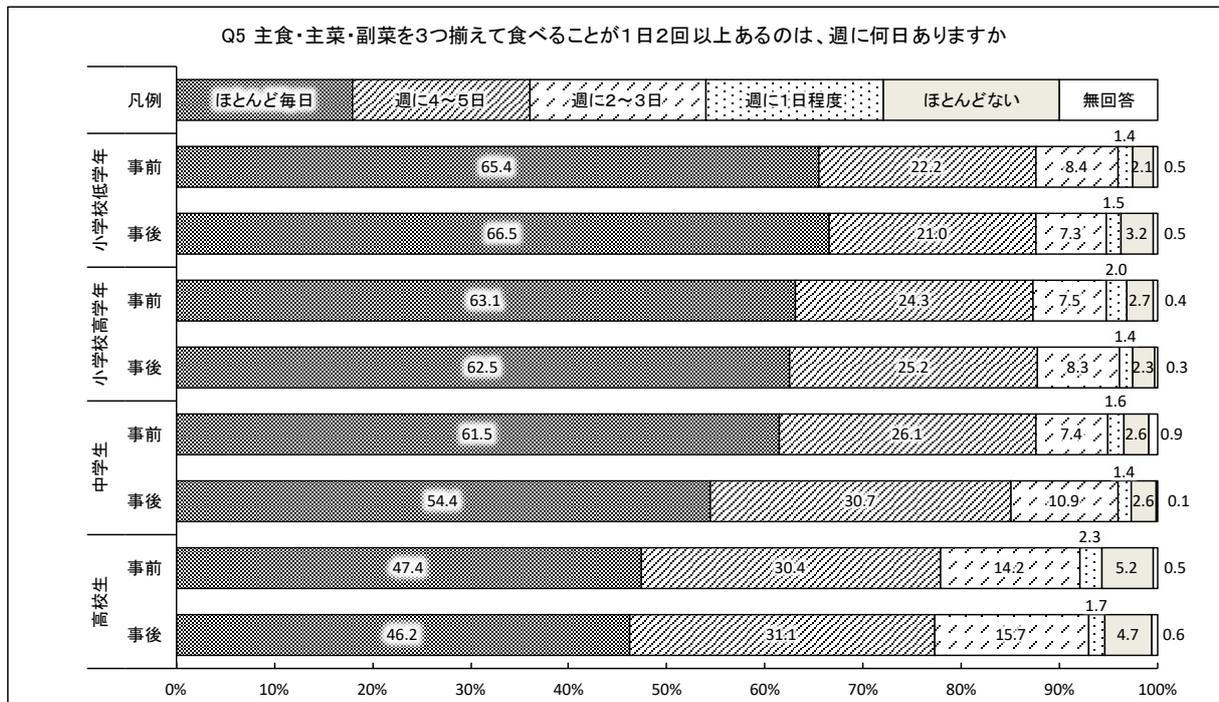
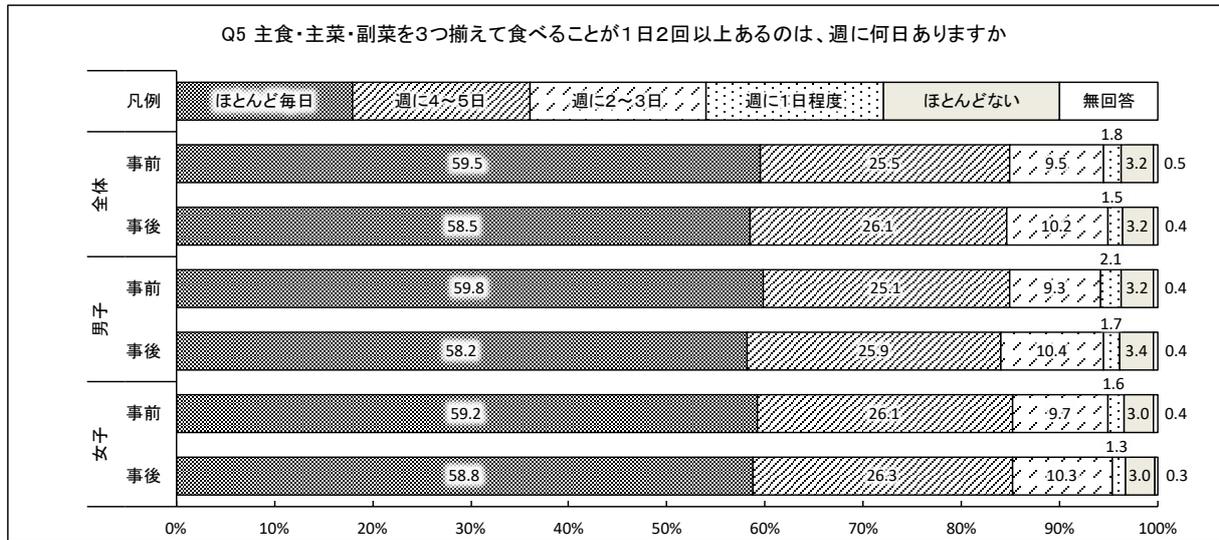
■全体及び性別・学校種別

- ❖ 栄養バランスを考えた食事の摂取状況をみると、事前調査では「ほとんど毎日」2食以上（学校給食も含む）で栄養バランスを考えた食事をとっているという児童生徒は全体の59.5%と約6割を占めており、「週に4～5日」と合わせると、85.0%が週に4日以上は栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とっている。
- ❖ 性別ではほとんど差はみられないが、学校種別でみると、学校給食が実施されている小・中学生と学校給食が実施されていない高校生との間で差がみられる。小・中学生では週に4日以上は栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とっている割合が90%近くであるが、高校生では77.8%であり、「ほとんど毎日」は高校生では50%に満たない。
- ❖ 事後調査でも事前調査と同様、約6割の児童生徒が「ほとんど毎日」栄養バランスを考えた食事を1回以上とっており、「週に4～5日」と合わせると、84.6%が週に4日以上は栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とっている。
- ❖ 事後調査においても性別ではあまり差がみられないが、学校種別でみると、事前調査よりも小学校低学年と高校生との間の差が大きくなっている。



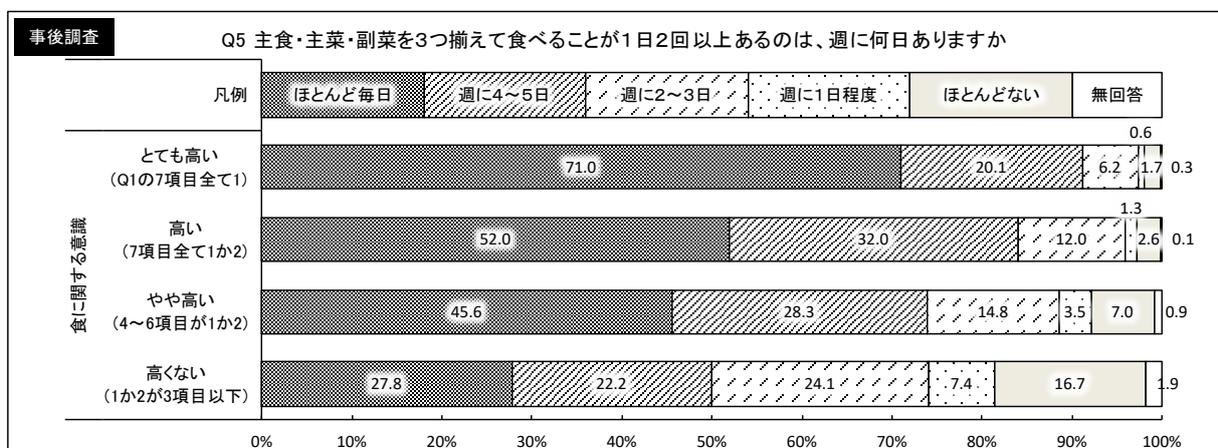
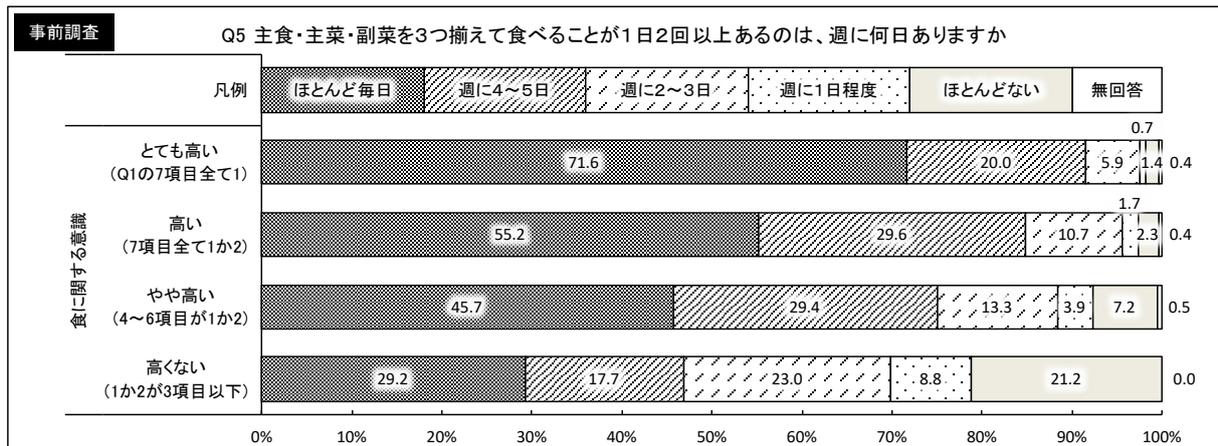
■事前調査と事後調査での栄養バランスを考えた食事の摂取状況の変化

- ❖ 栄養バランスを考えた食事の摂取状況について事前調査と事後調査で比較すると、全体では「ほとんど毎日」の割合は事後調査において1.0ポイント下がり、「週に4～5日」の割合は0.6ポイント上がっている。
- ❖ 性別で事前・事後を比較すると、男女とも全体傾向と同様、「ほとんど毎日」の割合はやや下がり、「週に4～5日」の割合は上がっている。
- ❖ 学校種別で事前・事後を比較すると、小学校低学年では「ほとんど毎日」の割合が1.1ポイント上がっている。また、高校生では「ほとんど毎日」の割合はやや下がっているが、栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とことが「週に1日程度」あるいは「ほとんどない」という割合も下がっている。



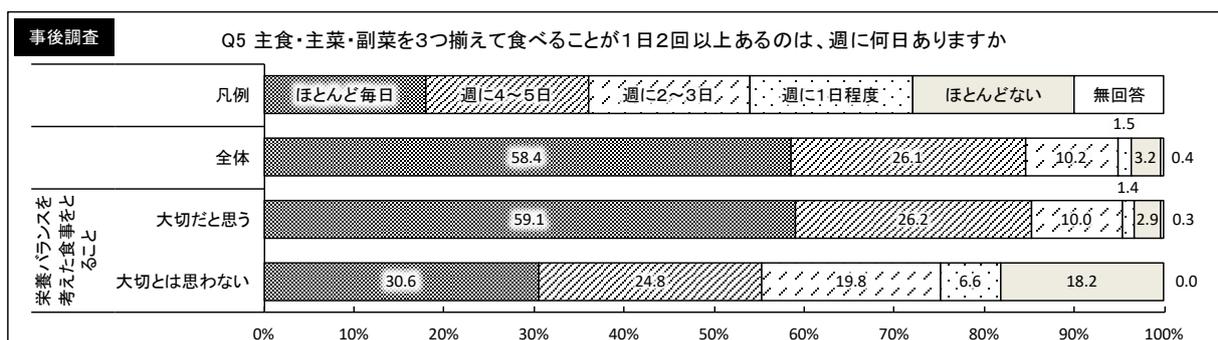
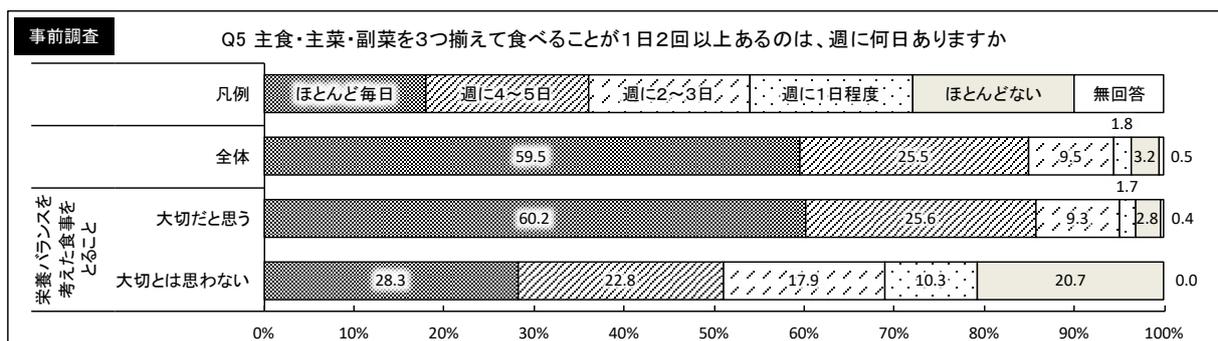
■食に関する意識とのクロス集計

- ❖ 食に関する意識の高さ別で栄養バランスを考えた食事の摂取状況をみると、他の食習慣と同様、食に関する意識が高いほど栄養バランスを考えた食事をとっている割合が高いという相関がみられる。
- ❖ 「ほとんど毎日」栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とっている割合は、食に関する意識が「とても高い」グループでは71.6%であるが、食に関する意識が低くなるにつれてその割合も小さくなり、意識が「高くない」グループでは29.2%である。逆に、栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とる日は「ほとんどない」という割合は、食に関する意識が低くなるにつれて大きくなる傾向がみられ、意識が「高くない」グループでは21.2%と、「とても高い」グループ（1.4%）より20ポイント近く大きくなっている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、食に関する意識が「とても高い」グループでは「ほとんど毎日」が71.0%と高い割合となっている。また食に関する意識が「高くない」グループでも、栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とる日が「ほとんどない」という割合が事前調査の21.2%から事後調査では16.7%に下がるなど、栄養バランスを考えた食事の摂取状況に改善がみられる。



■栄養バランスを考えた食事をとることに対する意識とのクロス集計

- ❖ 問1の食に関する意識のうち、特に問1-3「栄養バランスを考えた食事をとること」について、大切だと思う（「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した）児童生徒と、大切とは思わない（「あまり思わない」又は「思わない」と回答した）児童生徒に分けて、それぞれの栄養バランスを考えた食事の摂取状況を比較したところ、大切だと思う児童生徒の方が実際に栄養バランスを考えた食事をとっている頻度が高いという傾向がみられた。
- ❖ 事前調査では、栄養バランスを考えた食事大切だと思う児童生徒の60.2%が「ほとんど毎日」栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とっているのに対し、大切とは思わない児童生徒では、その割合は28.3%と3割に満たず、逆に栄養バランスを考えた食事を1日2回以上とる日が週に1日以下（「週に1日程度」又は「ほとんどない」と回答）である割合が31.0%と、「ほとんど毎日」より上回っている。
- ❖ 事後調査でも同様の傾向がみられ、栄養バランスを考えた食事大切だと思う児童生徒ほど、栄養バランスを考えた食事の摂取状況がよいことがわかる。また、栄養バランスを考えた食事大切とは思わない児童生徒についても、「ほとんど毎日」の割合が事前調査の28.3%から事後調査には30.6%と高くなっており、改善がみられる。



4-3. 保護者アンケートの集計・分析

(1) 対象者の属性

- ❖ 本アンケートの調査対象者は全モデル校の全児童生徒の保護者であり、モデル校に複数の子供（兄弟姉妹）が通っている場合も、基本的にはそれぞれの子供について回答する内容となっている。
- ❖ ただし、一部のモデル校では、児童生徒アンケートを全校児童ではなく各学年1クラスずつ選択して実施したため、保護者アンケートについても児童生徒アンケートの対象となった児童の保護者に限って実施された。
- ❖ その結果、保護者アンケートの回答数は5,732人であった。

	全体	性別		学校種別		
		男子	女子	小学生	中学生	高校生
保護者調査	5,732 (100.0%)	2,809 (49.0%)	2,843 (49.6%)	3,512 (61.3%)	628 (11.0%)	1,590 (27.7%)

	小学校	学年					
		1年	2年	3年	4年	5年	6年
保護者調査	3,512 (100.0%)	547 (15.6%)	551 (15.7%)	580 (16.5%)	587 (16.7%)	611 (17.4%)	636 (18.1%)

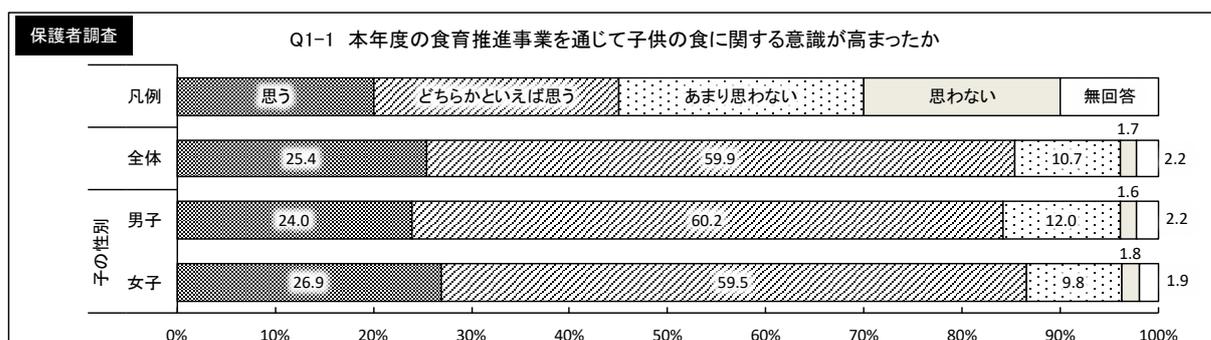
	中学校	学年			高校	学年		
		1年	2年	3年		1年	2年	3年
保護者調査	628 (100.0%)	171 (27.2%)	227 (36.1%)	230 (36.6%)	1,590 (100.0%)	578 (36.4%)	590 (37.1%)	422 (26.5%)

(2) 子供の食に関する意識の変化

①子供の食に関する意識が高まったかどうか

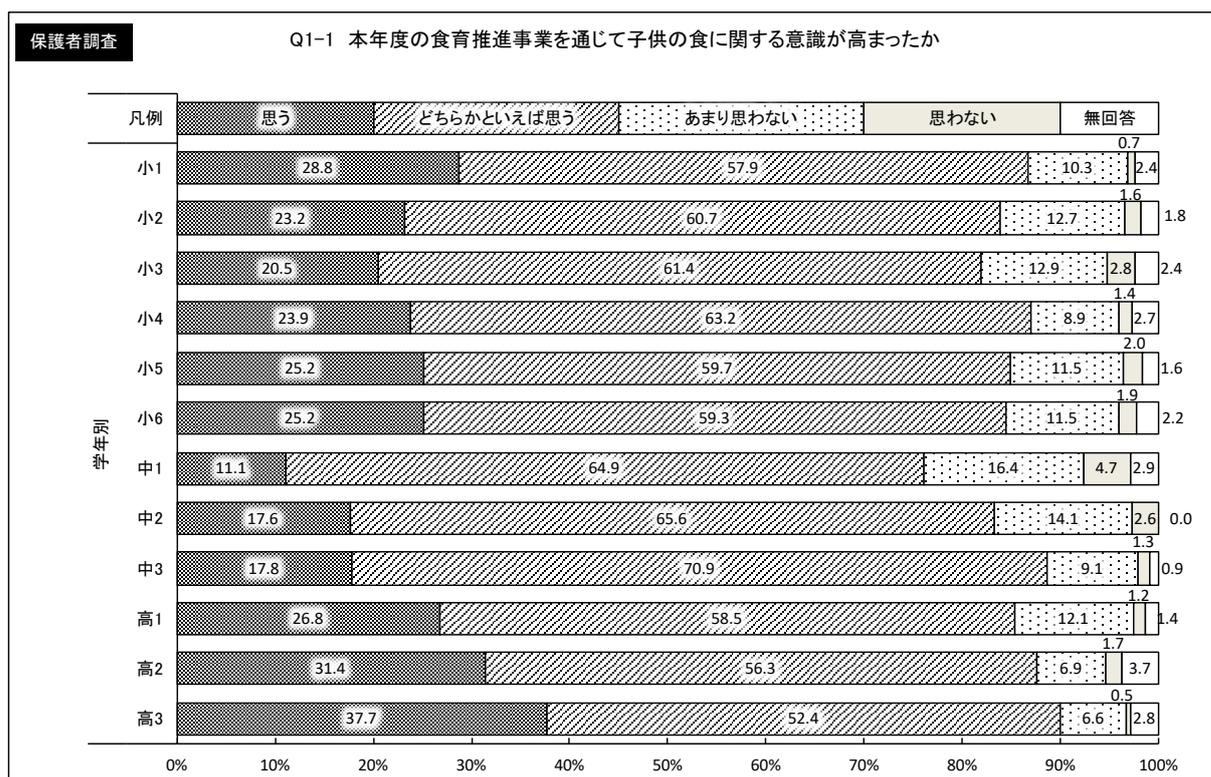
■全体及び性別

- ❖ モデル事業の取組を通じて子供の食に関する意識が高まったかどうかを聞いたところ、「どちらかといえば思う」が59.9%と最も多く、次いで「思う」が25.4%で、合わせて85.3%の保護者が子供の食に関する意識が高まったとしている。



■学年別

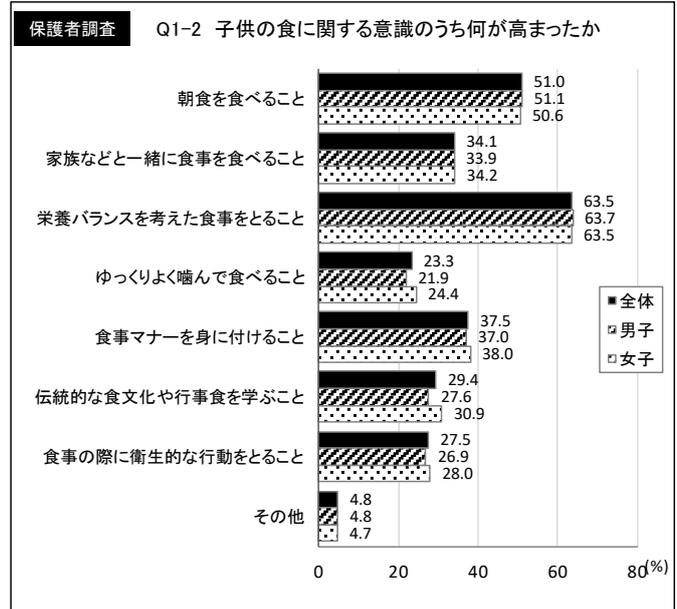
- ❖ 学年別でみると、小学生では、子供の食に関する意識が高まったとする割合は小学4年生の保護者で87.1%と最も高く、次いで小学1年生の保護者で86.7%となっている。
- ❖ 中学生の保護者をみると、「思う」の割合は相対的に低いものの、「どちらかといえば思う」を合わせると、中学3年生の保護者で88.7%と最も高い割合となっている。
- ❖ 高校生の保護者では、学年が上がるにつれて「思う」の割合も高くなり、高校3年生の保護者では90.1%が子供の食に関する意識が高まったとしている。



②変化がみられた子供の食に関する意識の内容

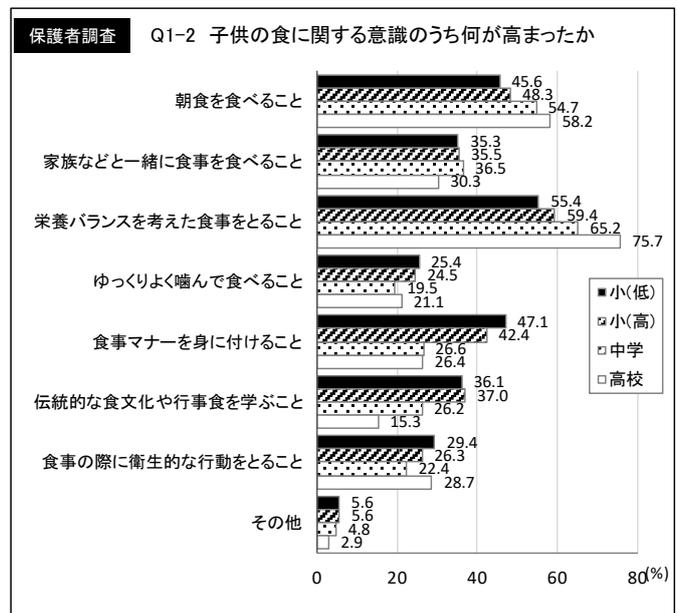
■全体及び性別

- ❖ モデル事業の取組を通じて子供の食に関する意識が高まった（Q1-1で「思う」又は「どちらかといえば思う」という保護者に対して、高まった意識の内容を選択肢で聞いたところ、最も多くの保護者から挙げられたのは「栄養バランスを考えた食事をとること」（63.5%）であり、次いで「朝食を食べること」（51.0%）であった。



■学年別

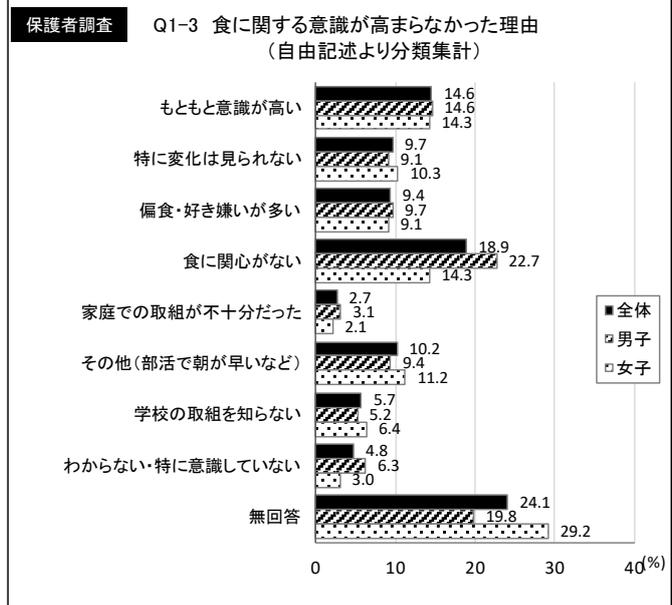
- ❖ 学年別でみると、「栄養バランスを考えた食事をとること」及び「朝食を食べること」の上位2項目については学年が上がるほど意識の高まりがみられたとされており、特に「栄養バランスを考えた食事をとること」については高校生の保護者の75.7%が挙げている。
- ❖ 一方、「食事マナーを身につけること」や「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」に関する意識の高まりについては、小学生において特に多く挙げられている。
- ❖ モデル校の高校では、成長期に不足しがちなCa（カルシウム）やFe（鉄分）が豊富に含まれたメニュー「CaFe メシ」の開発・提供などをはじめ、偏りのないバランスの良い食事を意識させ、自分に足りない栄養素を自分で補うことができることを目指した取組が実施されていたこと、また小学校の多くでは学校給食を活用して食文化や郷土食について学ぶ食育を展開していたことなどを考えると、それぞれの取組内容に応じた子供の意識の変化が保護者にも感じとられていることがわかる。



③子供の食に関する意識に変化がみられなかった理由

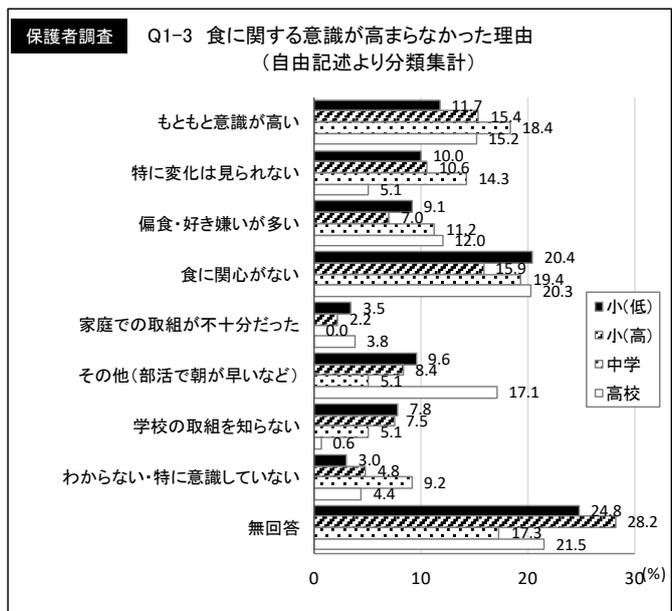
■全体及び性別

- ❖ 子供の食に関する意識が高まらなかった(Q1-1で「あまり思わない」又は「思わない」と回答した保護者に対して、その理由を自由記述で挙げてもらい、回答内容を分類集計した。
- ❖ その結果、②の選択肢で挙げたような食に関する意識はもともと高かったため、特にモデル事業の取組を通じてさらに意識が変わったということはない、という趣旨の回答が14.6%と比較的多くみられた。また、日常の家庭での行動に特に変化がみられなかったため、食に関する意識が高まったかどうか判断できない、という趣旨の回答も1割程度みられた。
- ❖ 一方で、意識が高まらなかった理由としては、「食に関心がない(食に対する関心が低い)」という理由が比較的多くから挙げられている。



■学年別

- ❖ 子供の食に関する意識が高まらなかった理由について学年別でみると、「もともと意識が高い」や「特に変化は見られない」という回答は中学生の保護者で多くみられる。
- ❖ 一方、「食に関心がない(食に対する関心が低い)」ため意識が高まらなかったという回答は、小学校低学年の保護者で最も多くなっている。
- ❖ また、高校生の保護者からは、部活や勉強などで時間的に制約があり、食事に意識を向ける余裕がないという趣旨の回答が比較的多くみられた。

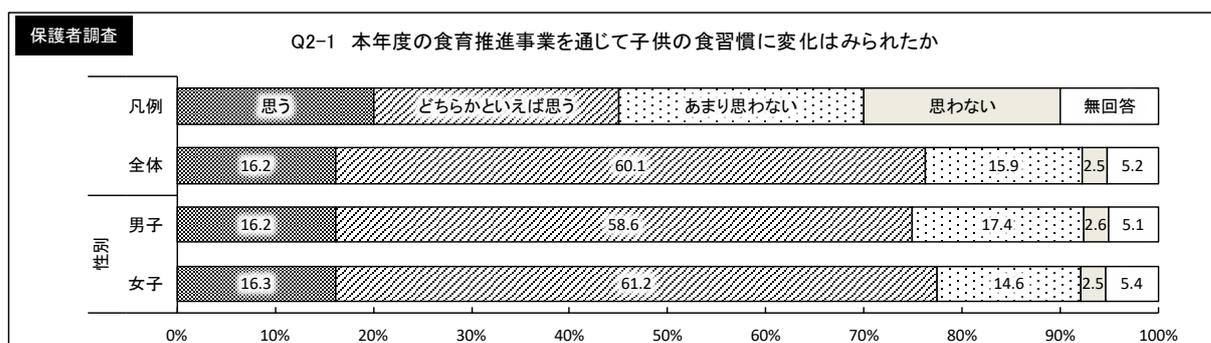


(3) 子供の食習慣の変化

①子供の食習慣に変化がみられたかどうか

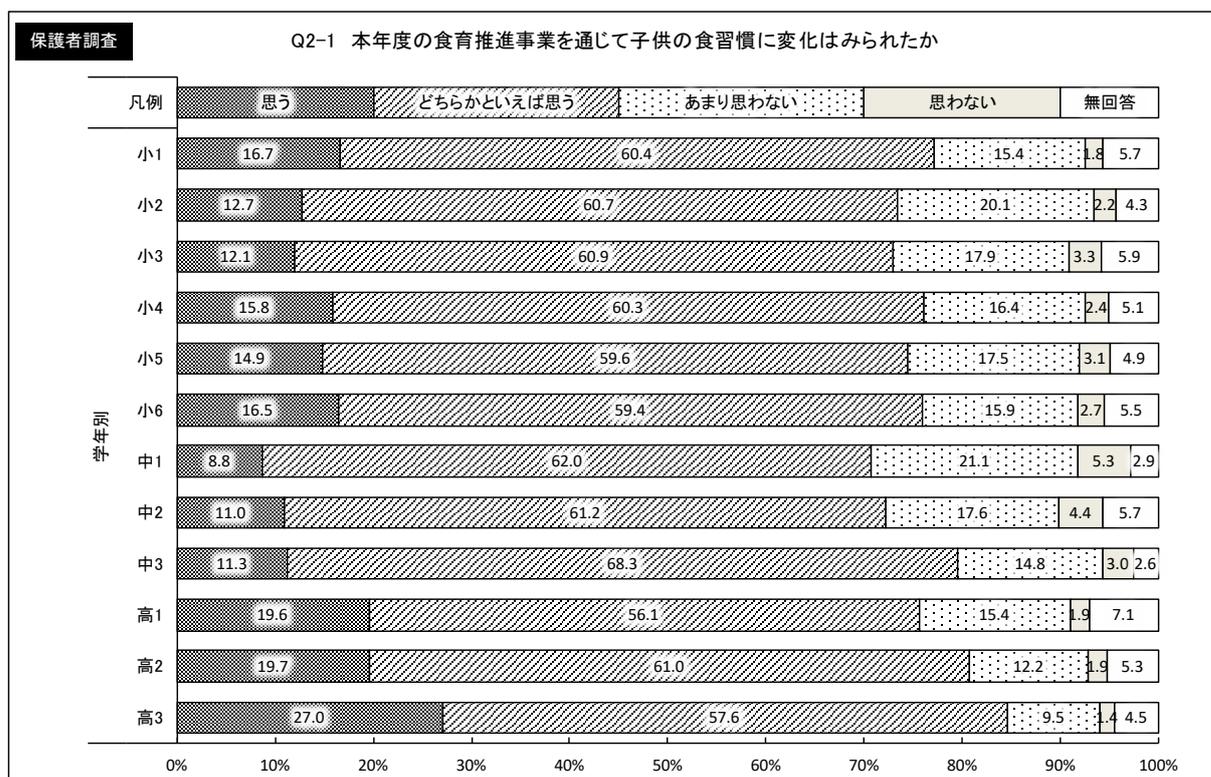
■全体及び性別

- ❖ モデル事業の取組を通じて子供の食習慣に変化がみられたかどうかを聞いたところ、「どちらかといえば思う」が60.1%と最も多く、次いで「思う」が16.2%で、合わせて76.3%の保護者が子供の食習慣に変化がみられたとしている。



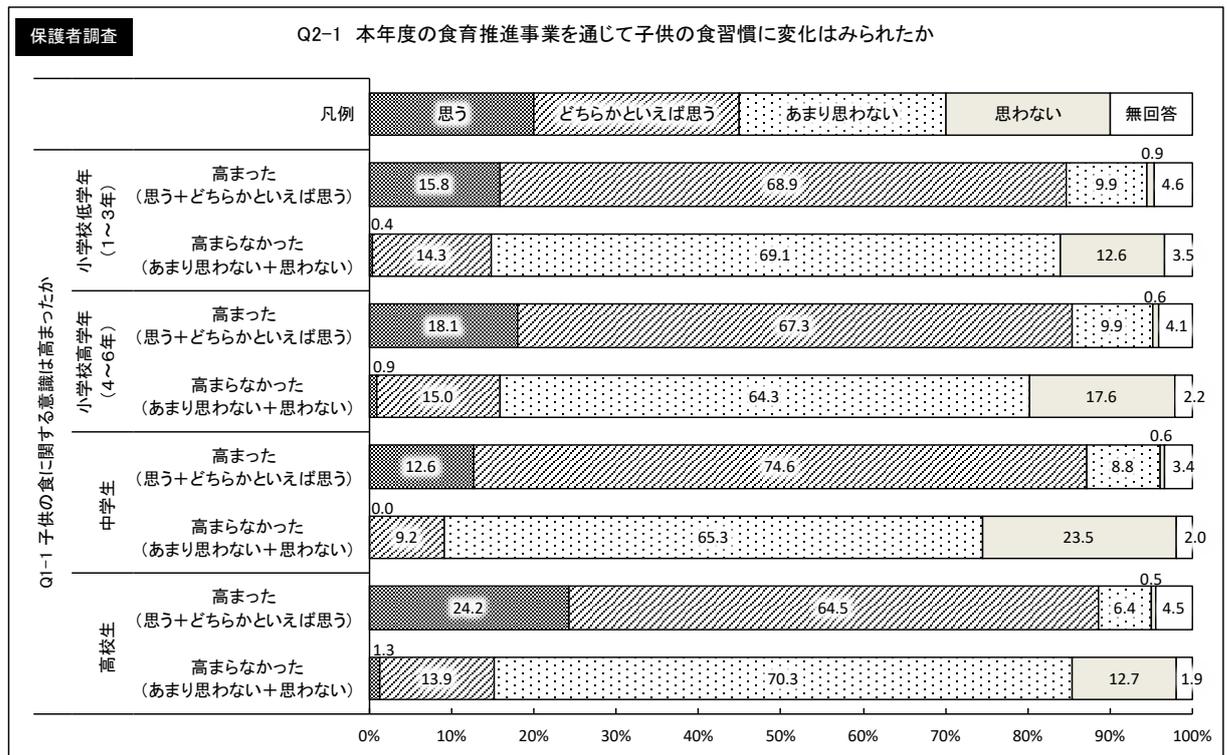
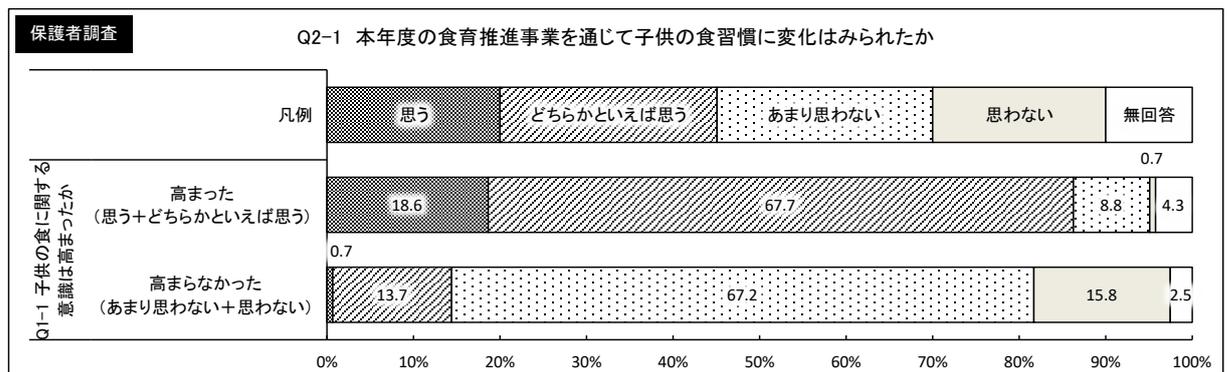
■学年別

- ❖ 学年別でみると、小学生では、1年生、4年生及び6年生の保護者で子供の食習慣に変化がみられた（「思う」＋「どちらかといえば思う」）という割合が75%を超えている。
- ❖ 中学生及び高校生の保護者をみると、学年が上がるほど子供の食習慣に変化がみられたとする割合が高く、中学3年生の保護者では79.6%、高校3年生の保護者では84.6%が子供の食習慣に変化がみられた（「思う」＋「どちらかといえば思う」）としている。



■食に関する意識の変化とのクロス集計

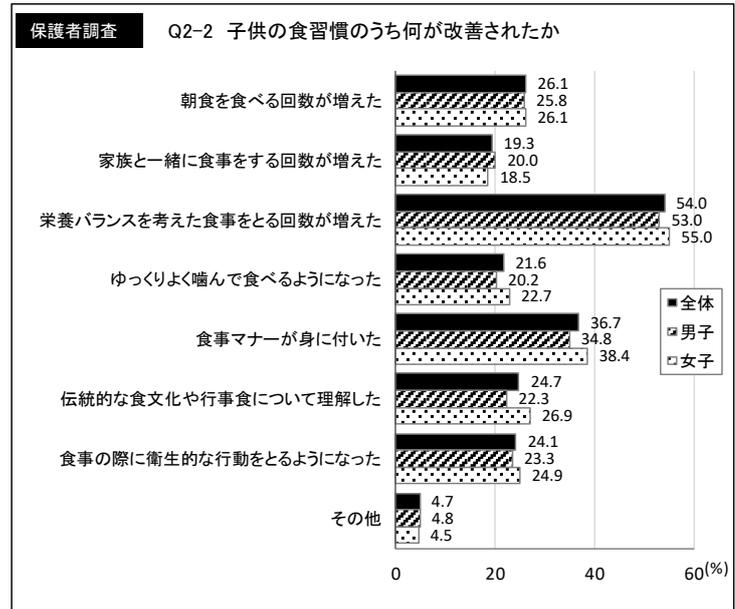
- ❖ 子供の食に関する意識の高まりの有無と食習慣の変化の関係をみると、食に関する意識が高まった子供の86.3%は食習慣に変化がみられた（「思う」＋「どちらかといえば思う」とされているが、食に関する意識が高まらなかった子供ではその割合は14.4%であり、食に関する意識の高まりと食習慣の改善状況との間には強い相関がみられる。
- ❖ 学年別でみると、いずれの学年でも食に関する意識が高まった子供の85%前後は食習慣に変化がみられたとされており、特に高校生で88.6%と最も高くなっている。一方、食に関する意識が高まらなかったとされた子供では、いずれの学年でも8割超が食習慣に変化はみられなかったとされている。



②改善された子供の食習慣の内容

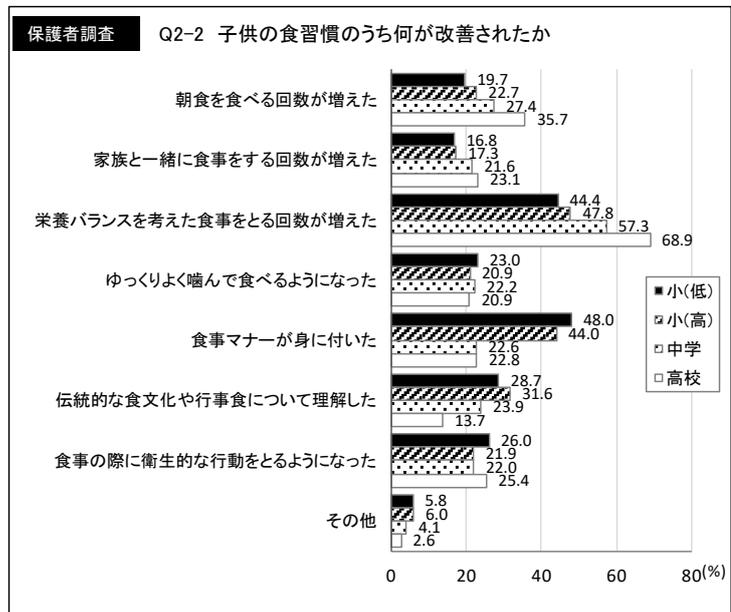
■全体及び性別

- ❖ 子供の食習慣に変化がみられた（Q2-1で「思う」又は「どちらかといえば思う」と回答した保護者に対して、改善された食習慣を選択肢から挙げてもらったところ、最も多くの保護者から挙げられたのは「栄養バランスを考えた食事をする回数が増えた」（54.0%）であり、次いで「食事マナーが身に付いた」（36.7%）、「朝食を食べる回数が増えた」（26.1%）などが高い割合となった。



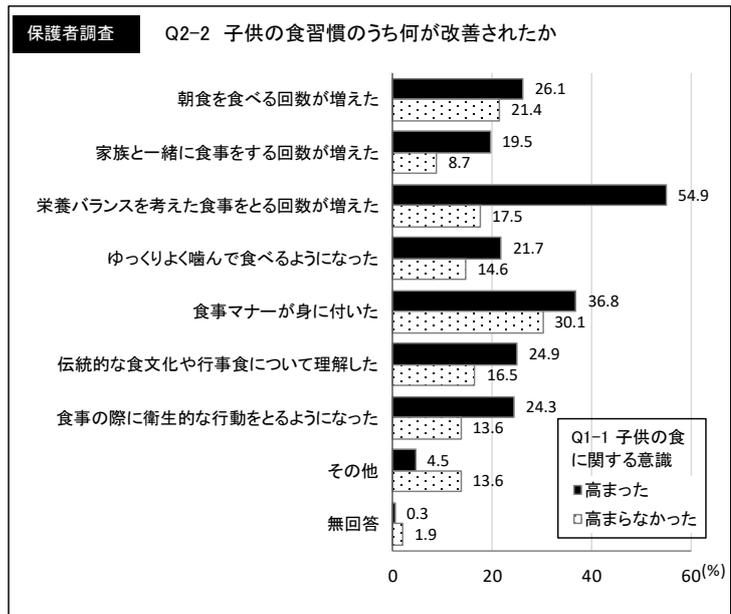
■学年別

- ❖ 学年別でみると、全体での上位項目のうち第1位の「栄養バランスを考えた食事をする回数が増えた」及び第3位の「朝食を食べる回数が増えた」については学年が上がるほど改善がみられたとされており、特に「栄養バランスを考えた食事をする回数が増えた」については高校生の保護者の68.9%が改善したとしている。
- ❖ このほか、「家族と一緒に食事をする回数が増えた」についても、学年が上がるにつれて改善がみられたとされる割合が高くなっている。
- ❖ 一方、全体で2番目に多くから挙げられた「食事マナーが身に付いた」は、特に小学生で40%超と高くなっており、小学校低学年では48.0%と高い割合となっている。

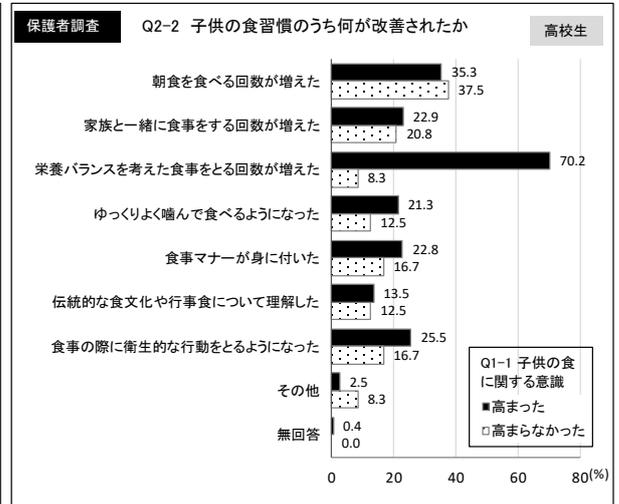
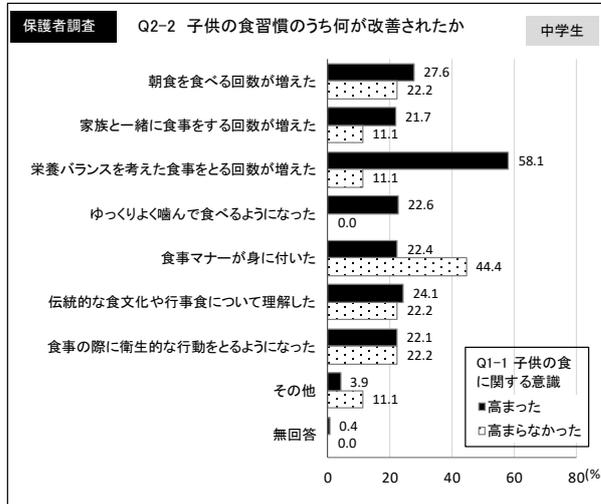
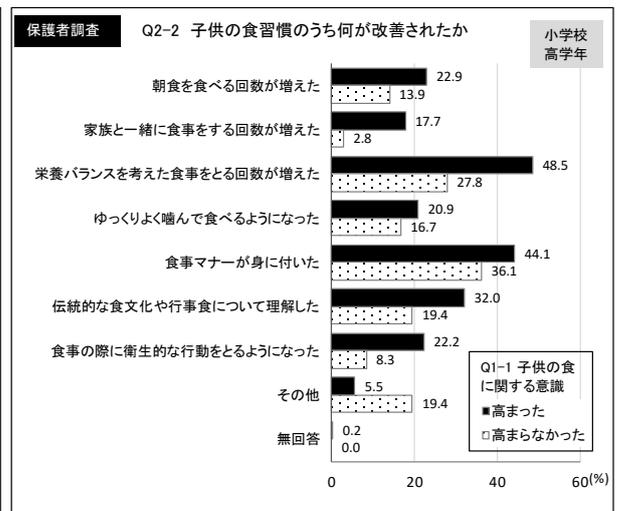
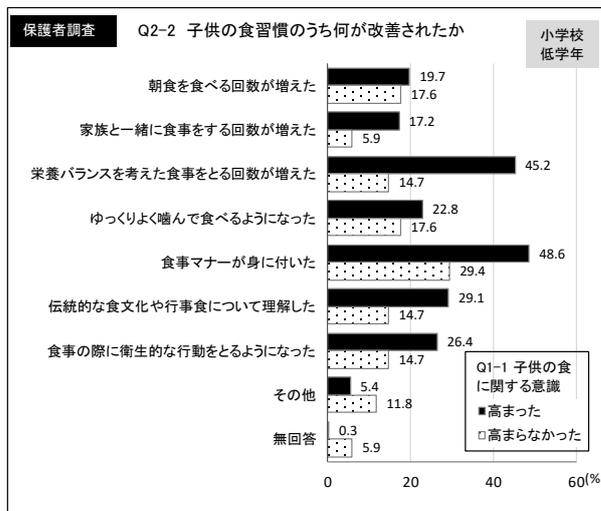


■食に関する意識の変化とのクロス集計

- ❖ 子供の食に関する意識の高まりの有無と改善された食習慣との関係を見ると、いずれの食習慣も食に関する意識が高まったとされる子供の方が改善しており、なかでも「栄養バランスを考えた食事をとる回数が増えた」については食に関する意識が高まった子供の半数以上で改善がみられる。



- ❖ 学年別でみると、小学生ではいずれの食習慣も食に関する意識が高まった子供の方がより改善されている。中学生と高校生では特に「栄養バランスを考えた食事をとる回数」について食に関する意識の高まりとの強い相関がみられる。



■食に関する意識の高まりと改善された食習慣の相関

- ❖ モデル事業を通じて高まったとされた食に関する意識と、モデル事業を通じて改善したとされた食習慣との相関を分析すると、それぞれの意識の高まりとそれに関わる食習慣の改善との間に強い正の相関がみられる。
- ❖ なかでも「伝統的な食文化や行事食を学ぶこと」への意識の高まりと「伝統的な食文化や行事食について理解した」という食習慣の変化との相関が **0.6121** と最も強いほか、「食事マナーを身につけること」への意識と「食事マナーが身に付いた」、「食事の際に衛生的な行動をとること」への意識と「食事の際に衛生的な行動をとるようになった」、のそれぞれにも強い相関がみられる。
- ❖ 直接的に関係する意識と食習慣の関係以外での相関をみると、「朝食を食べること」への意識の高まりは「家族と一緒に食事をする回数が増えた」という食習慣の改善に対しても正の相関がみられる。同様に、「家族などと一緒に食事を食べること」への意識の高まりは「朝食を食べる回数が増えた」という食習慣の改善に対しても正の相関がみられることから、両者の関係性が強いことがうかがえる。
- ❖ 同様の相関関係は「食事マナーを身につけること」と「食事の際に衛生的な行動をとること」に関わる意識と食習慣との間にもみられる。

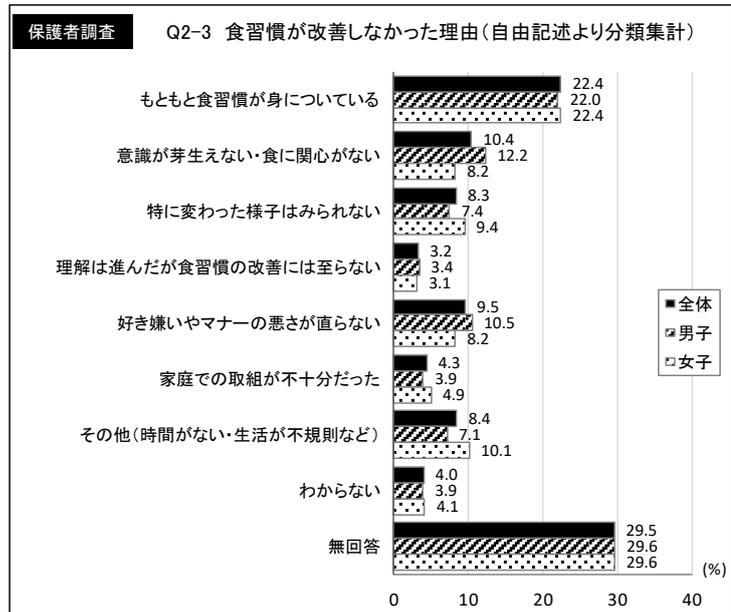
保護者調査		食に関する意識のうち高まったもの						
		朝食を食べること	家族などと一緒に食事を食べること	栄養バランスを考えた食事をとること	ゆっくりよく噛んで食べることにすること	食事マナーを身に付けること	伝統的な食文化や行事食を学ぶこと	食事の際に衛生的な行動をとること
改善された食習慣	朝食を食べる回数が増えた	0.4322	0.2342	0.0516	0.1068	0.0693	-0.0135	0.1222
	家族と一緒に食事をする回数が増えた	0.2803	0.4556	0.0744	0.1527	0.1376	0.047	0.1376
	栄養バランスを考えた食事をとる回数が増えた	0.188	0.129	0.5473	0.1071	0.0593	0.0348	0.137
	ゆっくりよく噛んで食べるようになった	0.1813	0.1998	0.1155	0.5434	0.1596	0.0526	0.1677
	食事マナーが身に付いた	0.1242	0.1853	0.076	0.1718	0.6093	0.1381	0.2437
	伝統的な食文化や行事食について理解した	0.0235	0.0722	0.0481	0.0461	0.1279	0.6121	0.1151
	食事の際に衛生的な行動をとるようになった	0.1747	0.1753	0.1292	0.1759	0.2219	0.1126	0.6005

※1～0.7・・・強い正の相関あり 0.4～0.7・・・正の相関あり 0.2～0.4・・・弱い正の相関あり -0.2～0.2・・・ほぼ関係ない

③子供の食習慣が改善しなかった理由

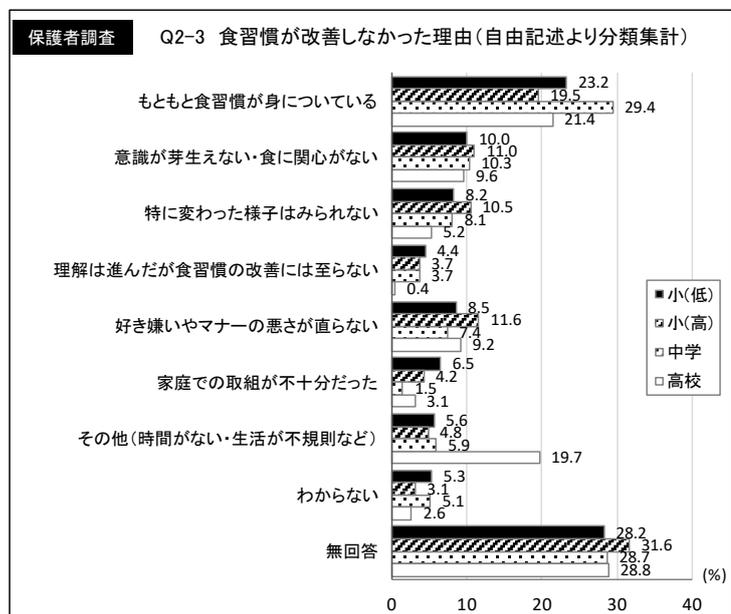
■全体及び性別

- ❖ 子供の食習慣が改善しなかった（Q2-1で「あまり思わない」又は「思わない」と回答した保護者に対して、その理由を自由記述で挙げてもらい、回答内容を分類集計した。
- ❖ その結果、改善しなかったのではなく、②の選択肢で挙げられているような食習慣はもともと身に付いていた、という趣旨の回答が22.4%と多くみられた。
- ❖ 一方で、食に対する関心が低く、なかなか日常の食習慣を変えるところまでの意識は芽生えなかった、という趣旨の回答も1割程度みられた。



■学年別

- ❖ 子供の食習慣が改善しなかった理由について学年別でみると、改善しなかったわけではなく、もともと食習慣が身に付いていた、という趣旨の回答は、中学生の保護者で特に多くみられた。
- ❖ 一方、食に対して関心がない、好き嫌いやマナーの悪さが治らない、という回答は、小学校高学年の保護者で最も多くなっている。
- ❖ また、高校生保護者からは、部活や勉強(塾通い)などでゆっくり食事をする時間的余裕がない、といった趣旨の回答が、小学生や中学生の保護者と比べて多くみられた。



(4) 今年度の食育に関する取組に対する意見、感想

■全体及び性別

- ❖ モデル事業での食育に関する取組に対する意見や感想を自由記述で挙げてもらったところ、1,109人(19.3%)の保護者から回答が寄せられた。記述内容を分類すると、取組を通じて子供の食に対する意識や行動が変わったという声が多く寄せられており、具体的には食材の買い物や調理、配膳などを手伝うようになった、栄養のバランスを考えて食べるようになったといった変化が比較的多く挙げられている。
- ❖ また、子供が学校で学んだことを積極的に話してくれるようになり、食に関する話題が増えたり、よりコミュニケーションをとるようになった、という感想も寄せられている。
- ❖ さらに、保護者にとっても改めて食の重要性等を学ぶことができよ勉強になったという声も多く聞かれ、有識者による講話や給食試食会、親子調理教室など、具体的な取組を挙げて参考となった点を示した回答も多かった。
- ❖ 一方、今年度の取組に対して具体的に改善点等を挙げた意見もみられ、食育に関する取組への意識・関心の高さがうかがえるほか、こうした取組は単年度で終わらせず今後も継続していくことが重要、という意見も聞かれた。
- ❖ その他、これからも家庭で食育に取り組んでいきたいといった感想や、普段から気を付けてはいるがなかなか子供の食習慣を改善することが難しいといった悩みなども寄せられている。

